
斜め35度右後方からその声はした。

清水澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斜め35度右後方からその声はした。

【Nコード】

N9803Z

【作者名】

清水澄

【あらすじ】

過去の恋人の事が忘れられない主人公、そんな彼女にアプローチをするものの彼も彼女の忘れられない過去に振り回されて・・・惹かれあいながらも、二人の心はすれ違っていく・・・。

R15は保険、コメディタッチで時々シリアス。そしてちょっぴり切ない恋愛ものを目指しています。

最後は、ハッピーエンドの予定・・・です。

はじまり…

斜め35度右後方からその声はした……。

おれ……お前のことがすきだ……。

モニターの音が響く夜のナースステーション。他の夜勤者はただいま巡視中だ。

私は、せん妄のおばあちゃんの見張りをするために一人詰め所に残っていた、

「ちーちゃん、たいくつですか？」

89歳のおばあちゃんは軽い肺炎と脱水でせん妄状態になり夜になると家と病院の区別がつかなくなり、同室者の迷惑になるために深夜まで詰め所で過ごすことが多かった。

「他の人は巡視？」

声をかけられて目をやると、一人の医師がドーナツの箱を手に詰め所に入ってきて来る場所だった。

「あれ？今日から夏休みじゃなかったけ？」

「気になる人がいたからちよつと顔を出したんだよ」

同期入職の彼は、ローテートで外の病院に出ていたのを先月帰ってきたばかり、頭もよく人柄もそれなりで、見かけもそれなり、しかも独身の31歳 若い看護婦の人気をさらっている。

なのになぜか、浮いたうわさのひとつもない。詰め所に差し入れを持ってくる暇があったら、彼女でも作ればいいのに……、などというおせっかいを考えつつ、もってきてくれた差し入れをありがたく受け取り思った事を口に出してしまう。

「夏休みだというのに、デートする相手もないなんてかわいそうにね。」

「……これからつくるからいいんだよ。」

そっぽを向きながらやや不機嫌に返事をする彼に苦笑を交えながら言った。

「まあ、おかげで差ししいただいたし。ありがとうございました。」

「……現金だな、あいかわらず……」

円いテーブルの向かい側に腰掛けながら、電子カルテを立ち上げるしぐさをなんとなく見ていた。気になる人って、そんな重症の患者なんて今いたっけ？

考えていると、彼がカルテの画面を見ながら言った。

「今日は、定時で終わるの？」

思わず、ききかえした。

「? ……なんで……?」

「終わったらラーメン食べに行かないか？」

「……. ……いいけれど。今日の夜勤者に……誰か誘いたい子がいるの？」

私の問いかけにカルテに視線を落としたままで、軽く眉をしかめた後低い声で返事が返ってきた。

「お前一人なら、おごるぞ？」

わあ！ラッキー！！
給料日前で今月は特に厳しかった。とつても助かる。

「いくいく!!どこまでも!!なんなら飲み付き合ってもいいよ! ……て、どうしたの? なんか悩み事? 相談? よし! お姉さんが聞いてあげよう!!」

お前のほうが年下だろう……。と苦笑いしながら彼は返事をする。そういえばローテート前はよく飲みいったよね。と、私もご機嫌に返事を返した。

……と、しょうもない会話で、すっかり目を話した隙に、行動

監視中のおばあちゃんは外にしようとしていた。

「あー ちーちゃんここに居てくれるかな」

立ち上がるうとしている患者さんの、車椅子の前にひざまずき、したから顔を覗き込んで視線を合わせる。

「おなかすいたの？おかしもってこようか？それともお茶飲む？そういうえば、日置先生にもらったドーナツがあるからこっそりいただくか？」

にっこり微笑みを返してくれるおばあちゃんの笑顔に、悩殺されながら、お茶とどーなつを取りに行こうと立ち上がるうとしたそのとき……。

「おまえのことがすきだ……。」

その声はした……。斜め35度右後方から……。

はじまり その2

「……………!?!?……………」

……………なんか聞こえた?

……………いやいや幻聴?

……………空耳?

……………あっ! わかった! ちーちゃんに言ったのね。

すこし、不安におののきつつ声の主を首を回して、ゆっくりと見上げる……………。

奴は、少しの動揺も見せず、クールな笑顔で私の耳元でささやく。
。「放射線科側の出口の駐車場に車を止めている、ラーメン食いに行くよな? 逃げるなよ?」

啞然とする私からすばやく離れた彼

は、巡視を終えてドアから入ってきたスタッフに、
差し入れ持ってきた、とドーナツの箱を指差して笑顔で去っていった。

……………ナニガオコッタンダ……………。

時刻は、午前1時。

私は速攻で申し送りを済まし、他のスタッフに挨拶をして、更衣室で急いで着替えた。

もちろん待ち合わせの場所など目指すわけもなく、指定された駐車場から一番遠い出口を目指して走った。

パートナー的な存在が不必要だと思っているわけではない、独身主義でもないが、気持ちが付いていかず、必要以上に親しくなろうとする相手は遠ざけてきた、今もその主義は変えるつもりはない、彼がどういふつもりか今ひとつ図りかねるが、危ない橋は渡らないに限る。

今はとりあえず逃げてなかったことにしてしまおう。

長い廊下を抜けて、ほっと一息ついて夜間ロックのかかっているドアにカードキーを通し外に出た、

「よしよし・人影はない、そつと辺りを見回しつつ、タクシーを拾うために構内をでて大どろりに出ようと歩み始めたそのとき、後ろから腕をつかまれ引き戻された。

「……！！うえ！！！」

「……相変わらずだな・その色気も何もない驚き方やめろつて……」

「……なんでここにいるの？」

聞き覚えのあるその声に私は目を瞑り、顔を上げられず首をすくめながら問うた。

「……それは……俺のせりふじゃないのかな？ 君こそなんで待ち合わせた駐車場から一番遠い出口から出ているのかな？」

「……ちよつと、道をまちがえた……かな？」

言い訳をしながら首を回してそつと薄目を開けると……そこには……

これ以上はないぐらい、素敵な笑顔で微笑む彼がいた……そして、明らかに怒っているであろう低い声で、彼はのたまわれた。

「……ふん？……。この病院に6年も勤めて、寮にも入っていた君が、この病院の構内で迷うことがあるなんて……ね？」

逃げ腰になっている私に 今度はこれ以上はないぐらい優しいまなざしを向けて彼は言った。

「貴重な時間を、こんなところでつかってもなあ……」

独り言を言いながら、私の手を引っ張りつつ、構内の道路に止めてある車に向かった。

あつ・懐かしい、まだこの車に乗ってたんだ。

私の視線にきずいたのか、はにかみながら言った。

「ちょっと目的があって、車にまで資金が回せなかったんだ」

研修医のころにバイトに行くのに必要だからと、中古車ショップで購入していた軽自動車、冗談で私がグリーン色がいいと思ったらその色を購入していた。彼はそのころ同期の中では一番私と気があって、頼れる仲間だった。ローテーションで疎遠になっていたが、大事な友人の一人だという事には変りはない。

そんな、友情を育んだ思い出の一ページを振り返って良い気分である私の気持ちを察知せず。早く乗れよ!!と、助手席側のドアを開けて彼は私を車の中に押し込もうとする。

ちよつと、いたいって!! そうだ、こいつは、大事な友人でもあるが、思い込んだら自分の道を周りも見ずに突っ走る迷惑極まりない奴でもあった。

無理やり押し込まれしぶしぶと助手席に座った私のシートベルトを締めて内側からドアロックまでご丁寧にかけてドアを閉めて、奴は急いで運転席に乗り込んだ。

「……ずいぶん親切にしてくれるのね……。」

訝しげな私に、涼しい顔で彼はのたもうた。

「当たり前だろう。自分が乗り込んでいる隙に逃げられたら、目も当てられない。どんだけ、この日を待っていたと思うんだ!」

「……?! ドンだけ親切なんだろうと思ったのは、逃げるときに時間がかかるようにするためですか?」

私が啞然としている間に、車はすべりだした。

「……ねえ?」

前を向いたまま、奴は返した。

「? なに ? 帰るって話は聞かないぞ?」

「……いや? そんなに、一人でラーメン食べるのいやだったの?」

「……..はあ! ?」

目を見開いて、ゆっくりと奴はこちらを見た。

ちょっと！運転中！！危ないって！！

大きなため息をつきながら、前を見て、まったく・・・とか、どうしたらいいんだ・・・。

とか、ぶつぶつ言っている。

そんな彼を見ながら私は考えた。友情以上のものがあるんだろうか？いや、以前から彼は読めない奴だった。いろんな女性がモーションかけていたが、意に介さずわが道を行っていた人だ。私の勘違いの可能性も高い。そんな勘違いで、彼にいやな思いをさせるのもどうかと思う。

「おまえ、あしたから5連休だったよな？」

・・・よく知ってますね。まあ隠してたわけでもないけれども。

返事をせずに黙っていると、

「貴重な、連休だよな？」

・・・？ 何が言いたいんだろう？と、思わず顔を見ると、

にっこりと、悪魔の微笑を浮かべる横顔が見えた。・・・なんかいやなよかんがする・・・。

「時間はあるし、ゆっくり飲もうか？」

・・・それは、友人としての、純粋なお誘いですよ・・・ね？

はじまり その3

気がつけば、なぜか彼のマンションにいた。夜中に安くてゆっくり飲めるところはここだろうと、押し切られた。

まあ、昔はよくよっぱらって皆と雑魚寝をしたから、初めてのお泊りではないけれど・・・、この状態で、この時間に、ここに来るのはかなり御遠慮しなかった。

最近越してきたんだ・・・と言って案内してくれたそのマンションは、どう見ても、一人暮らし用でない。4ldkで賃貸でなく、お買い上げだそうだ。

・・・そうですか、そりゃねあんたの給料だったら、買えるかもしれないわよね。

「・・・うわぁー きれい!!!」

リビングから、ベランダが見える。眼下に広がる、見事な夜景!!!思わず声をあげた。

「たそがれ時は、もっと、すごいぞ。」

いつのまにか隣に來た彼が軽く肩を抱いてささやく。

・・・何するんだ?・・・と 軽くにらみつけると、何事もなかったようにキッチンに向かいワインとビールどちらがいい?と涼しい顔で微笑まれた。

ここで、この状態でお酒を飲むのもまずい気がしたので、ノンアルコールのものがいいと伝える。

「・・・酒飲みのお前が、ノンアルコール?・・・何か予防線張ってるのか?俺ってそんなに信用されてないか?」

ちよつと傷ついた顔をして返された。やっぱり私の思い過ごしかな?それになんか有るなら、今まで一緒にいた時間の中でとっくにどうにかなっていただろう。

「口ゼある?」

もちろん、・・・と返事が返り、冷えたワインと、グラスと、おつまみを持ってローテーブルの上に置いてくれた。座ると夜景が見えないのが残念だが、椅子より床に座るほうが私は好きだ。彼が持ってきた大きなクッションにもたれくつろいでしまった。

・・・自分が怖い・・・。

隣に座ったら殴ってやろうと身構えるワタクシの期待にはずれて、彼は向かいに腰をおろした。

「このまま、子供が出来てもすめるね。」

空腹にワインなんぞをいただいてちよつといい気分になった私が軽口をたたいた。

「その前に、嫁もらわないとね」

あさつてのほうを向きながら、まじめに、彼が答える。

「誰かいるんじゃないの？こんな、妻帯者用のマンション購入して？結婚フラグたってるじゃない？」

「・・・いるよ、手に入れたい人が・・・。」

真剣な顔をして、こちらを見た。

・・・いやな空気が流れる・・・。思わず身をすくめた。

「・・・だったら、私なんかにかまってないで、その人さそえば？」

彼に好きな人がいたとは、初めて知った。もっとも3年も離れていたのだからきずかなくても仕方がない。そうか、好きな子がいるのかと少しショックを受けて、それでも幸せになって欲しいと、彼を見た。

「どんな子なの？」

私の問いに、下を向いてため息をつきながら彼はいった、

「・・・多分、まったく相手にされていないんだ、俺のことを、かばっちゃか芋だと思ってる。男としても認識していないと断言できる

ね」

・・・その話を聞いてかわいそうになった。もともと私は彼は嫌いではない、むしろ友人としてとても大事に思っている。幸せになつて欲しい。そんな友人が、好きな人に異性として感じられていないなんてとても同情をしてしまう。そりゃどこかでストレス発散もしたくなる気持ちもわかる。だが、わたしでは愚痴の相手ぐらいにしかねれない・・・。

「私相手に、女性心理を聞きだそうと思つても無理だと思ふよ？だって私は世間一般とかけ離れてる自信があるもの。」

・・・ほんとにね、・・・と溜息交じりに彼はつぶやいた。

どっちにしても、ストレスは私に向けられても困る。発散の対象に私が選ばれていることは、ちよつと不服だが、わらをもつかむ心理はわからないでもない。

顔はそんなに悪くないと思う。なまじつか当たり障りのない性格をしているのも、問題なんだろうか？世の中マニアックな好みの人が多いからな？

いやいや、実は やさしいんではなく単なるヘタレだつてことに先に気づかれたとか？優柔不断で決めきれない性格してるしなあ・・・それに、みょくなどこ細かいし・・・思い当たりは、いろいろあるよね・・・。

男として認識されていないって・・・。なんか、モーションはかけているんだろうか？でもそんな相手だと手も出しにくいだろう。それだったら、まだ男として嫌われたほうがましかもしれない、男と認識されるだけ・・・。男と認識されていない相手に自分の性別を認識させる方法なんてひとつしかないと思うが、この一見周りを見ずに突き進むところもあるが、肝心なところでへたれてしまうこの男にそれを実行する勇気があるかどうか・・・。

などなど、彼が私の心の声に気づいたならば、本格的に傷つくだろうな・・・。

という内容のことを頭の中で考えつつ彼を見た。

わたしの、心の声に気づいたのか、彼はいった。

「・・・なんか、不本意なことを考えられてる気がする・・・。」

「いやいやいや、そんなことはないですよ？ほらほら、お姉さんが聞いてあげるから」

どンドン吐き出して頂戴よ。ほらここに座って!!」

「・・・だから、おまえは年下だろうって・・・。まあいいか、・・・よこすわっていいのか？」

ぺしぺしと、自分のとなりをたたく私を見ながら彼はいった。

「向かい合わせだとお酌しにくいなと思っていたのよ。今日は一晩中付き合ってあげようじゃないの！」

のそり、と彼は移動した。・・・？いやでもそんなに密着しなくても・・・。確かに隣にとは言ったけれど・・・。いやいやいや、思う人に思われず人肌恋しいのかな・・・と解釈してあえて異論を唱えなかった。

・・・はい、浅はかでございました。・・・

殆んど私を抱きかかえるような形で密着した彼の行動をあえて無視し、わたしは温かい視線で相談に乗った。

「でも、聞けば聞くほど、困った人だね。」

本当に、聞けば聞くほどあきれてしまう。

その人と彼の関係は6年にも及ぶという。私もまったくきずかなかった。私たちが友情を育んでいたときに、彼は彼女に対する恋心を育んでいたらしい。でもいったい誰だろう？上手に隠したものだ。

もつと早く相談してくれば良いのに。本当に友達がいのない人だ。
「・・・まあ、おれも、冷却期間をおこうかと思って連絡取らなかった時期もあったんだ。

周りの女性に気のあるそぶり見せた時期もあったけれども、まったく反応なかったし」

まあ飲んで、・・・とグラスにワインを注ぐ、話を聞くうちに、口
ずから始まり、白、赤、と3本目のフルボトルが空いた。

宅配の、ピザをつまみながら、私は涙目になっていった。

「しんちゃん。けなげだね。」

彼は、4本目出そうか？と聞いたが、私はかぶりを振った。

「いやいやいや、飲んでいる場合ではないって。どうにかして、その人を落とそうよ。でないと安心して飲んでられないよ!!」

こんだけ飲んで、飲んでる場合じゃないって・・・お前ドンだけ酔ってんの？・・・というため息交じりの声が聞こえた。

「どうしたら、俺の気持ちに気づいてくれる？」

覗き込むように、真剣な目で聞かれる。

うんうん、かわいそうにね、いい加減落としたいよね、切羽詰るよね。と考えながら、彼の真剣な瞳をぼっと見ていた。

・・・あれ？・・・何か違和感を感じる・・・。酔った頭で、違和感の正体を考える。

「無理やり、押し倒そうかと思った時期もあったけれど、そんなこととして傷つけるのも違うと思って出来ない・・・」
そのせりふに思わず叫んだ。

「だめじゃない!!ヘタレ!!」

目を見開き、のけぞってる彼に私は言い放った!!少し・・・いや、かなり私は出来上がっていた・・・。

「6年だよ!!6年!!男として認識されていないんでしょう!!
!後はもう、自分が男だって、無理から認識させるしかないじゃな

い。すきだって言っても聞いてないんでしょう！？後は押し倒すしかないよ！！！」

嘸然としてこちらを見る彼に私はここぞばかりに続けた。

「いつもいつもそう！！一見わが道行ってる様に見えるくせに肝心なところで引いてしまう！！だからいつもリーチかかっているのに、大事なものに限って手に入れ損ねてるんじゃないの！？そういうのなんていうか知ってる？ヘタレって言うんだよ！！一度くらい勇気出してチャレンジしなよ！！」

あたって砕けてしまえ！！と叫んだ私を見つめて、彼は砕けるは余計だ！と言った。

そしてしばらく私を見つめていた。どのくらい時間がたっただろう……。見開いていた目を閉じて、こめかみに手を当てて、ため息をつきながら彼はいった。

「……そうだな、すきだって伝えても幻聴扱いだもんな？あのシュチュエーションで、何でおれが　ちーちゃんに、告白せんといかんのだ？」

横にいた彼との距離が縮まった。腕をつかまれた。

「……おまえ……、これだけ言っても、自分に心当たりはないのか？」

酔いが一瞬でさめた。今私、何か非常にまずい事をいった気がする……。

「……えーっと？宴もたけなわでございますが、わたくし、長居をしているみたいなので……そろそろおいとまを……。」

立ち上がろうとした私を逃がすものかと片手が抱きしめ、あいた

片手がゆっくりと私の顎を捉える。

「5連休だったよな？奇遇だな？俺もだよ」

よかったですわね、と逃げようとしてみた。・・・でも逃げられない。やな汗がでる。

「お前言ったよな、後は押し倒すしかないって・・・。」

いやいやいや言ったような、言わないような・・・それはワタクシ除外ということでお願いしたいのですが・・・？。

「お前の助言どうり、肝心のところで引いてしまうヘタレは卒業する事にするよ」

彼は私の頬をなでながら続けた。

「ゆっくりと、俺の性別が、雄だってこと認識してもらおうよ・・・それから、いろいろ相談することもあるしな・・・。」

いやいやいやいや、ちよつとまってくださいな・・・。

「・・・自分の発言の責任は取れよな。」

奴の唇が、わたしのそれにゆっくりとかさなった・・・。

はじまりのそのあと

なんで、私はここにいるんだろう……？

「おはよう」

啞然としている私の唇に、軽いキスを落としながら彼はさわやかに微笑んだ。

「トースト、チーズのせる？ バターは？」

「
•
•
•
•
両方」

さわやかに微笑む、彼に答えながら、ベッドから降りた。なぜかパジャマは着ている、自分で着た覚えがないということとは彼が着せたのだろう。腹立つぐらい、紳士だ・・・いやいや・・紳士だったらあんな暴挙に出ないだろう!!

・ ・ ・ ・ ・ ! ! ! ! !
 ダマサレテハイケナイ ! ! ! ! !
 ・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ 確かにあつたのは私だが ・ ・ ・ ○

「卵はどうする？目玉？スクランブル？」

「チーズオムレツ!!」

キッチンから、笑い声が聞こえる。むう・・悔しい、嫌がらせにな
ってないようだ・・。

着替えを探す、見当たらない。たずねるのも悔しいので、パジャマのままキッチンに向かった。

「皿とって」

言われて、差し出すと、湯気のたったきのこのチーズオムレツが乗った……。悔しいほんと嫌がらせをされてるのは私のような……。」「……きのこすきだろう？」

じつと皿をにらみつける私に気づき、彼はいった。

「・・・嫌いじゃない・・・」

悔しいので、そう答えた・・・くそう・・・笑うな・・・なんでそんなにご機嫌なんだろう？

「パジャマ、だいぶ大きいな？ 今日必要なものを買に行こうか？」

・・・はい？・・・

「5日もあるしね、着替えもいるだろう？」

・・・もし？・・・

「からだ、きつくないか？ 初めてだったんだろう？」

・・・言うな・・・思い出させるな・・・・・・あんなのためにとってたんじゃない・・・・・・機会とその気になれなかっただけ・・・。

「おれは、うれしかったよ、6年我慢した甲斐があった。」

涙目で、にらみつける私の目じりに彼はキスを落とす、・・・まあ怒るなって・・・俺の性別は認識してくれたよな？ ってにが笑いしなからささやいた。

・・・・・・いたしましたよ？ このなんともいえない場所の違和感と、全身の筋肉痛が、その成果だと思えます・・・。

「食べないとさめるぞ」

悔しい、何でおなかはすくんだろう？

悔しい、何でこのきのこオムレツおいしいんだろう！！

ご飯を食べて、おいしい紅茶をいただいた。

「お腹膨れた？」

彼は、極上の微笑を私に向ける・・・。やな予感・・・。

「・・・うん・・・」

「じゃあ、腹ごなしの運動しようか・・・？」

・・・！ちょっとまったあ！ 出かけるって話は！？・・・
「だって、おまえ、まだ隙あらば俺から逃げようとおもってる・・・
よね？俺はお前の助言どうりヘタレは卒業したんだ、もう逃がさない」
後ずさりしようとしたが、後ろは壁だった。逃げ場をふさがれる。
私の願い、抵抗もむなしく・・・ベッドルームに引きずられていった・・・。

別に、バージンにこだわっているわけではない。
結婚まで清い体で、というこだわりもない。
なのにこの年まで？・・・とびっくりされるかもしれない。
そんな、機会がなかったといえばうそになる。

「ぜータイヤだ！行きません」
小さいころからずーっと、となりの12歳年上のいとこの優ちゃんが大好きだった。

お医者になるんだと、医学生になったその人は本当に毎日忙しそうだった。

中学に入り、優ちゃんも医師試験に合格し、お医者になったらますます忙しくなり、あえない日が続いた・・・。
あまりにもかまってくれない彼に少しすねて、何で美香と遊んでくれないのと聞くと、自分は不器用だから人の倍努力しないとおいでいかれるんだよ、と笑っていた。

親たちの間では、なんとなく結婚の約束が出来ていた。もちろん

それは、優ちゃんが親に頼んだことで私が中学2年生の夏に申し込まれた。ロリコンだね・・・とよく笑っていた、でも美香が高校に行つて変な奴に捕まったら、後悔しきれないから・・・。美香のバージンは僕のものだからね、と言つては私にどつかれて、それでも笑つてた。

高校2年の夏休み、珍しく休みが取れたので旅行しようと誘われた。もちろん1泊で・・・。

当然のごとく、私は抵抗した。

「ゼツタイやだ」

「なんで？」

「恥ずかしいもん」

「なにが？別に良いじゃないか？いまさらだろう？」

でも恥ずかしいし、怖いものは怖い・・・。それでなくとも、美香のバージンは僕のものだと公言し、会うたびに押し倒されている、なにもないはずはない。

「美香が嫌がることはしないって、約束するから・・・ね？」

うう・・・負けそう・・・。いやいやいや

「でっでもまだ、約束の年じゃないじゃん」

「美香は僕のこと信じてないんだ・・・。」

いやいやいや・・・そういうことではなくって!!

「だめなものはだめっ！」

何である時、一緒に行かなかったんだろう・・・。

何で、もっと上手にもう少し待っててっていえなかったんだろう。

あのときの、優ちゃんの傷ついた笑顔が忘れられない。

そして・・・その知らせは、学校に届いた。

「橘！お母さんが迎えに来ているから、すぐ帰れ！」

私は、優ちゃんの申し出を喧嘩別れした形で断りクラブ活動に出ていた、

母が何で？教室を出ると、真っ赤な目をしたお母さんが震える声で言った。

「美香、すぐ来て・・・」

・・・怪訝な顔で、母を見たが、詳しいことは教えてくれない。仕方がないのでついていった。いやな予感がした。

母は、私をタクシーに押し込んだ。何で自分で運転しないんだろう？1時間ほどして、救急病院にタクシーが着いた。

母は、痛いぐらいの強さで私の手をつかみ廊下をかけた、病院だし廊下は歩かないと……。などと、妙に覚めた目で私は母を見ていた。

外科病棟の病室の前で母が止まった。

「美香を連れてきました・・・」

ドアが開き、おじさんが出てきた・・・真っ赤な目をして・・・。

その向こうに、おばさんが座り込んでいる、なっているようだ・・・。

誰かが、ベッドに寝ているようだ、でも、器械と包帯だらけでよく見えない。

お父さんが、私を後ろから抱きしめてくれた。何か言っているがよく聞こえない・・・。

優ちゃんがない、いつも、美香が困ったときには必ず大丈夫だよっていつてくれるのに……。どこにいるんだろう？おかしいな？こんなときほどそばにいてほしいのに、何してるんだろう？

お父さんが何か言ってる・・・？聞こえないって！！お母さんが何か言ってる？聞こえない！！ゆうちゃんはどこ？優ちゃんはどこ

？ねえ？誰か教えて？意地悪しないで？

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!! いやだ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

周りが真っ白になった。

無免許の飲酒運転だったらしい・・・。

横断歩道で信号待ちをしていた、優ちゃんに突っ込んで行ったと聞いた・・・。

何にも悪くないのに・・・。

お医者さんになりたてのとき、自分の持った患者さんのおばあちゃんに、プロポーズされたけれど、美香がいるからって断ったよってうれしそうに言っていた。

私も、看護婦になるっていたら、じゃあ将来は二人で田舎に行って開業しようね・・・ってうれしそうに言っていた。

優ちゃんのうそつき・・・。

美香のバージンどうしてくれるのよ？

美香死ぬまでバージンじゃなか！

責任とってよ！！！！今すぐ帰って来い！！

誰かにゆすられて、目が覚めた・・・。

あれ・・・？

「ちよっと、だいじょうぶか？・・・ごめん、気がついたか？」

覗き込んでいる、心配そうな瞳、コノヒトハダレ？ユウチャントハカオガチガウ・・・。

私が、怪訝そうな顔で見ていると、奴はあせった顔で

「・・・本当に大丈夫か？　俺が誰かわかるか？」

「・・・ええ・・・ええ・・・わかりますも。私が育んでいた友情を粉々にした、日置真一・・・。手籠めにしただけではものたりず、軟禁して、おもちゃにしてる。」

「・・・なんかもものすごく、俺にとって不名誉なこと考えてない・・・？。」

「・・・事実じゃない！！性別認識だけなら、一回でいいじゃないですか？　なんでこんなに何回もいたされているの？　自分が彼を煽った事実は棚上げして、彼を睨みつける。」

「ゆうちゃんてダレだ？　おまえ、ひとりっこじゃあなかったけ？」

「・・・言いたくない・・・聞かれたくない・・・もう帰して・・・」

ため息をつきながら、彼は言った。

「まだ、俺の気持ち認識できない？」

「・・・あなたの気持ちじゃなくて、私の気持ちの認識は？」

ゆっくりとこちらを見てしばらく考えて、頭を抱えた後・・・ベツドから降りた奴は服を着ながら、振り向かずと言った。

「・・・わかった、送る。この事は謝る気はないからな？」

そんなことはどうでもいい、私はここから帰りたい。5連休は優ちやんに会いに行くためにとったんだ・・・。

・・・デモ、ユウチャンハモウイナイ・・・ミカヲ　ダキシメテモク
レナイ・・・。

急に私の中で現実が迫ってきた。・・・そうだ、あんなにがんばってバージン守ったのに何でこんなことになちゃったんだロウ・・・。

「ゆうちゃん・・・どうして、みかをおいていっちゃたの？　美香のバージンなんでこんなヘタレにとられたの？」

泣き崩れる私を、彼は優しく抱きしめながら、・・・ごめん・・・っ

てつぶやいていた。

！！！！やっぱりへたれじゃん！！あやまるぐらいならヤルなっつ！！謝られても、処女膜は再生しないんだよ！！バカヤロウ！！私の心の声が聞こえたのか、己の所業をいまさらのように反省したのか、彼はずっと、私を抱きしめたまま、謝り続けてくれた。そして、その温かい腕の中で、泣き疲れた私はいつの間にか眠っていた。

結局、5連休は、彼のマンションで過ごす羽目になった。

もちろん、3食昼寝付き、セックス抜きだ。

お食事？そんなん私を作るわけないでしょう？ここぞとばかりに、こきつかってやりました！。

奴の料理はオムレツ以外も絶品だった。

.....私って.....。

連休が明けて、仕事に出かけた。

おばちゃんに、帰れなかったことをわびたが、電話の向こうで、いいのよ美香ちゃん、でもお嫁に行くときは、おばちゃんにも美香ちゃんから報告してね。・・・と言われた。

・・・相手もないのに、どうやって嫁に行けというんだろう。

連休明け、私は勤務につくために病院の廊下を歩いていた。

「おはよう、」

耳元で声がした、心臓に悪い……。普通に挨拶できないのだろうか……。

「…………おはようございます、お元気でしたか？」

ずっと一緒だったのに？……と言うような彼の視線を無視して私は詰め所に向かった。

詰所に入ると、ちーちゃんがいた。夜遅いちーちゃんがこんなに早く詰所にいるのは珍しい。

「ちーちゃんどうしたの？朝から？」

「うーん、それがね……」

？？？深夜勤の看護婦の歯切れが悪い。？何があったんだろう？

横をすり抜けようとした私の手をつかみ、ちーちゃんが言った

「真一さんをとらんでくれるか？」

……………！？　はい？？…………

「こないだ、ぷろぽーずされとったじゃろ？」

……………！！　はいいい！！？？…………

ゆっくりと、深夜勤務者に目を向けた……。曰く5日前からずっと私に言いたいことがあるからあわせろの一点張りだったそうだ。

そういえば、主治医だったよな・・・？

その”真一さん”が詰所に入ってきた。ちーちゃんは、その手を握り締めながら言った。

「あんな小娘の、どこがいいんじゃ！！」

苦笑いをしながら、奴はこっちを見てのたもうた、

「おれを、男認定していなかったのお前だけだったみたいだな・・・？
いや、雄としては5日前に、体で認識してくれたんだっけ？」

いやー、うそー、どういふことー、という黄色い声が、詰所の中に響き渡り、私は、今日なんで仕事なんだろう・・・と軽いため息をつきながら、この騒ぎの原因を作った彼をにらみつけた。

その視線を、彼はスルーして、お部屋に帰りましょうか？、とちーちゃんに微笑を返していた。

だめ！ちーちゃん　だまされないで、そいつはヘタレの悪魔よ！
貞操の危機よ！！

私の心の声もむなしく、ちーちゃんは、奴に車椅子を押してもらいご機嫌だった。

仲のいい看護婦の都に襟首をつかまれた私は、ため息をつきながら聞いてみた。

「聞かなかったこと、なかったことに出来ない・・・？」

・・・無言・・・

「・・・わかった、主任、詰所内の收拾に、夕飯1回。」

「・・・飲みにして・・・。」

「・・・わかりました・・・。」

襟首を離して、都は周りを見回し、申し送りを始めます！準備はいいの？！　と静かに言った。

一瞬で詰め所の黄色い声は静かになった。・・・さすがだ・・・。
事の顛末を、いつの間にか戻った彼は涼しい顔で入り口で眺めた

後、どこかに去っていった・・・。

あなたが払えよ、！！飲みだい！！！！

騒ぎから2週間、何事もなかったかのような静けさを病棟は、取り戻した・・・。

変わったことと言えばこの2週間、私は彼と必要最低限のことしか喋らず、彼のほうもそうしていたと言うことだ。

明日は、公休日 私は病棟主任である都との約束を果たすために、いつもは行かないこじやれた飲み屋にいた。

「・・・で？ 何があったの？」

店に入り、オーダーを頼み、日本酒を飲みながら、都がいきなり切り出した。

「・・・もうほとぼり冷めたし、その話はいいいじゃん・・・」

「・・・私が押さえてるに決まってるでしょう！？それとも？無責任な噂を放置しましょうか？」

「・・・それは困る・・・非常に困る・・・これでもアタクシはこの職場が気に入っているんだ。」

「・・・夏休みの前の準や勤務の日に、日置先生が差し入れを持ってきてくれたのよ。そのときに、ちーちゃんが詰所にいて、ちーちゃんと喋ってたら・・・」

「・・・たら？」

「後ろから、好きだ・・・って、・・・言われたらしい・・・」

「
都が めをまん丸にして私を見つめた、そしてあきれたようにため息をつくと言った。」

「・・・何？その不確定 不確実 他人事のような話は？あきれる

わね？」

私は、都の手を思わず握って言った！

「そうでしょう！！ひどいでしょう！！あんまりでしょう！！」

都は、そんな私の手を冷たく振り解き、手酌で日本酒をコップに注いでいた。

「・・・・・・私が、あきれているのは あ・ん・た！！」

思わず、声を変えて唸る様に吼える・・・・・・もとい、語る都に慄きながら 恐る恐る聞いてみた。

「・・・・・・なんで？ 私が悪いの・・・・？」

驚いてる私に、彼女はあきれた顔を隠そうともせずに淡々と言い放った。

「・・・・・・あんた、本当に分かってなかったの？ 6年前から、日置の態度は回りにばれだったじゃないの？ 本人もまったく隠してなかったし。まあ、ローテートから帰ってきてさすがに大人になったのか、公私をつけれるようになったとは思ったけれども、それでも丸分かりの態度だったわよ？ 同期入職の中ではいつまともるかって、かけの対象にまでなっていたのに・・・・・・本当に？ 分からなかったの？」

私は、ぷるぷる 首を振った・・・・・・知らない・・・・・・知るわけがない・・・・・・

・・・・・・ぽかんと口を開けてる私に笑顔で、・・・・・・ちなみに、胴締め私ね・・・・・・と追い討ちをかける・・・・・・。

・・・・・・友情って・・・・・・？ 人間不信になりそうだ・・・・・・

いつの間にか、コップ酒は私の分も用意されていた。明日は休みだったよね、事の顛末の一部始終語ってもらわよ・・・・・・？ と言うささやきとともに・・・・・・。

「んで？ すきだって言われてその後、どうしたの？」

「・・・・・・べつに・・・・・・」

「小学生とお話してるのかな・・・・・・？ ワタクシは？ そんなたわごとで許されるとお思い？」

怖い・・・怖いよ都・・・あの人とか、この人・・・どう見ても一筋縄で行かないおじちゃん（教授）達を手玉にとって、病棟をまわしているだけはある。影の番長（師長）だもんね。

一見にこやかに微笑んでいるように見えて有無を言わさないその氣迫と、コップ酒の勢いを借りて、私はしぶしぶ白状した・・・。

「最初はね、仕事終わったらラーメン食べに行こうって誘われた・・・」

都は、3杯目のコップ酒を私に注いでくれた。

「でも、幻聴が聞こえたでしょう？」

都が、半眼で私を眺めている・・・怖いって・・・。

「・・・これはやばいって思って、待ち合わせスルーしようとしたら捕まって・・・。」

都が首だけで、3杯目を飲めと促した、逆らえない私は指示に従った・・・。

「飲もうかって彼が言い出して店に行くんだって思ったら、家のみが安いからってマンションに連れて行かれて・・・」

都・・・そのガッツポーズは何？今度はあたしが半眼になる・・・。

「・・・彼の好きな人がなかなか落ちない、自分の気持ちに氣づいてもいない、男だとも思われてないどうしたら良いんだって、相談されて・・・」

「・・・なんていったの？・・・」

「そんな人は実力行使で男だと言うことを分からせろ！！！」
押し倒せ！って・・・。」

「・・・で、押し倒されたんだ？」

「・・・うん。」

「・・・あの、ヘタレにしてはがんばったよね」

「あー！！都もヤッパリヘタレだと思うよね！！！」

本日、初めて私と意見があった都の発言に嬉しくなり私は思わず身を乗り出した。

そんな私の笑顔を無視するように、都は続けた。

「但し、アイツがへたれるのは、あんたに関する事だけだよ。」

「・・・へ？」

「あの決断力、実行力、頭の回転の速さ、統率力、あんたも分かっているでしょう？」

「・・・うん」

「何で、アイツがマンション買ったか知ってる？」

「彼女と暮らすためだって・・・あ・・・」

「そうだよ、美香 あんたのためだよ？叶うかどうか分からない思いのために、いつもがんばってる、そんな男だよ？」

「・・・そういえば、目的があって、車にまで資金が回らないって・・・」

「ねえ、美香？忘れられない思いがあるって言うのは分かるけれどもいつまでその思い出を引きずっているの？そろそろ前を向いても良いんじゃないの？」

「・・・ズキン・・・シンゾウガイタイ・・・」

「思い出の中の人が、美香を抱きしめてくれるの？ 守ってくれるの？」

「・・・イキガデキナイ・・・ヤメテ・・・」

「ねえ、美香足元を見てごらんよ。今、あなたのそばにいるのは誰？支えてくれるのはだれ？」

「・・・胸を押さえながら、思わず私は聞いた。」

「・・・都・・・あんたは、どの位に賭けたの？」

下を向いた都が思わず舌打ちをしているのを、私は聞いた・・・確かに、聞いた・・・」

「帰ってきてから、2ヶ月以内。」

「・・・倍率は？」

「・・・70・・・」

「・・・一口？・・・」

「・・・千円・・・」

眩暈がする・・・いったい何人が参加しているんだろう？ 観念し

た都を締め上げて参加者の名前を聞く、教授陣の名前まであげられるのを聞いて、・・・頭痛までしてきた。

でも、体だけじゃねえ～～心もってってくれないと意味ないじゃん・・・。ってボソリと言った、都の言葉に温かい気持ちになった私は甘いのかな？ゴメンね心配かけて・・・。

4杯目の、お酒に手をかけた・・・。

「ごめん！！遅くなった！！！！」

「・・・ほんと、帰ろうと思ったよ？」

5杯目で、潰れてしまった美香を横目で指しながら、都は声の主に言った。

「・・・ごめんって、出ようと思ったら、緊急内視鏡の手伝いが欲しいって言われて、活動性で、止血に手間取ったんだ。」

ビールお願いします・・・と注文をしながら、声の主はお絞りで手を拭いた。

・・・さり気無く横に座り、美香？と甘い声でささやきながら、そのささやいた相手のかみの乱れを直してやっている男を都は観察していた。ささやかれた姫はグウスカピーと夢の世界だ。

「ヤッたんだってね・・・？」

ビールを思わず噴出しそうになっている相手を見ながら、都は淡々と続けた。

「ヘタレ返上出来たんだ？」

「・・・それは、どうだろう・・・」

苦笑いをしながら、男はビールを飲み干した。美香が言ったのか？と男は聞いた。

「・・・あほか！ 詰所で自分が言ったことも忘れたの？」

ああ・・・あれね・・・。そんなに、きわどいい方だったっけ？と

平然と返す。

ホントにこの男は、美香に対すること以外だと悔しいほど冷静だ、あれもどうせ他のライバルの牽制にするつもりでわざと言ったに決まっている。

「ちーちゃんがショックで認知症がましになったてよ？いくつになっても女は恋をしないと駄目だよね？」

「・・・それ、こいつに言い聞かせてくんない？・・・と 自分の隣で撃沈している女に言葉とかけ離れた優しい目を向けながら言った。

「・・・あ、じゃあ手にいれたのは、体だけで、心は入ってないって、自覚はあるんだ」

「・・・ほんと、遠慮なしだね、おまえ・・・」

「体も、この調子じゃ一度だけの思い出って可能性もあるわよね」
「」

「いやもう、二桁には載らないとは思うけれど・・・近いと思う・・・」

「あんた、一晩でなんかいしたの？」

鬼畜！！と叫ぶ都に、何で一晩だと思うんだ？と返したら、だって、美香が許すわけないじゃん。と返され反論できずに黙ってしまった。

「・・・一晩じゃないぞ？夜中から夕方にかけてだ。」

「・・・一晩は延べ2日でしよう？ 夜中から夕方なんて1日じゃない？もっと駄目じゃん」

ああいえば、こういう・・・さすが美香の親友だ・・・たちが悪い。隣で寝ていた美香がもそもと動いた。

「ううん・・・優ちゃんだあ、美香を迎えに来てくれたの？嬉しい！」

抱きつかれて、思わず固まる・・・？ちょっと待て？だから？優ちゃんて誰だ！？

ああ・・・確かに雰囲気は似てるかもしれない、でもあっちのほうがヘタレてなかったけれどね・・・。都のあまり嬉しくない台詞を聞

きながら、抱きついてきた美香を思わず抱きしめて抱えなおす。

「こいつ、兄弟いないよな？ 優ちゃんて誰だ」

「・・・知りたい？」

「・・・・・・」

「・・・美香が、敢えて公言しないことを、私の口から聞きたい？」

「・・・・・・」

「いいよ、教えてあげても？」

「美香に聞くからいいよ。」

都は、にっこり微笑んで。よかったわ・・・と言った。

「ヘタレ返上のご褒美に、美香のお持ち帰りを許してあげるわ。」
ビールを自分のコップに注ぎながら、都は言った。驚いてる僕をちらりと見ながら、但し美香の気持ちは美香のもだけれどもね・・・
といやな台詞をはく。

判っているよ、スタートラインに立つ権利が手に入っただけだと言うことは・・・。

いままでは、その権利さえ持っていなかったんだから・・・。

あわてず、確実に、手に入れて見せるよ。・・・ずっと、俺のものにしてみせる。

俺の腕の中ですよやすやとねいきをたてる美香の頭のとっぺに口付けを落とした。それを見ていた都が言った。

「続きは場所を変えてください。」

そのままの体制で、僕は都に視線を向けた。そんな僕を見据えて、都は言った。

「・・・別にあなたじゃなくてもいいのよ・・・？ 美香をしあわせにしてくれる人なら誰でもいいの、今たまたまあなたがいるから頼んでいるだけよ？ もし、少しでも美香の意に反することをして、美香を傷つけることがあったなら、覚悟はしておいて・・・ね？」
こちらを見て静かにそれだけ言うと、都はにっこり微笑んで店員に

お愛想とタクシ―2台お願いしますと告げた。

嵐のあとで

くくくくんくくあったかいくくふわふわするくくいいきもちくく

私は、ゆっくりとその感触を味わうとともに薄目を開いた。

大きな腕、温かい広い胸、そして、優しいにおい・・・あれ・・・？

「・・・？優ちゃん？・・・」

「だからそれは誰だ？」

聞きなれた声が頭上からする。都は？ここは？

「・・・俺のマンション、水飲むか？シャワー浴びるか？気分は大丈夫か？」

声の主は、啞然とした目を向ける・・・なんであんたが？何で私はここに？

「・・・酔っ払いをつれて帰れないって都が俺にSOS出したんだ、あいつもかなりよってて、アパートに送っておいたよ。」

それでなんで私は、あんたのマンション？じと目でにらむ私の視線を避けながら、奴は言った。

「都が、お前は飲みすぎたから一晩隣で様子見たほうが良いっていうから・・・仕方ないじゃないか！」

なんか・・・すごい言い訳に聞こえる・・・にらみ続ける私の視線をかわしつつ彼は言った。

「それとも。ERで点滴したほうがよかったか？」

「・・・その事態だけは絶対避けたい・・・」

「ありがとう、でももう大丈夫だから・・・帰るわ」

立ち上がるうとして、ふらついた。おかしい、そんなに飲んでないはずなのに・・・？

ふらつくあたしを抱きしめるように支えて彼は言った。

「泊まっていけよ、お前の嫌がることはしないって約束するよ。それに、この状態で帰したら俺が都に怒られる」

「・・・本当に？・・・ならこの手はなんだあ？」

「・・・だって、おまえ、離れたらこけるぞ？」

「紅茶が飲みたい・・・」

わかった。と彼は言い私を軽く抱きしめ（られたように感じただけかもしれないが）キッチンへと向かった。

私は、ローテーブルを前にクッションにもたれて座った。ミルクで良いか？と声をかけられて、うん・・・と返事を返す。湯気のたったミルクティーのはいったカップが置かれた。

「・・・優ちゃんて誰だ？」

「・・・いたくない、あなたには関係ない・・・」

私の、きっぱりとした拒絶に少し彼は傷ついた顔をした。

「・・・隣に座ったら駄目か？」

「・・・どうぞ・・・」

私の返事に、少し驚いた顔をしてそれでも嬉しそうにこちらへ来る・・・くそう・・・少し心が揺れる。

相変わらず、必要以上に密着してくるやつの身体と少し距離を置こうと身体をよじる。

「・・・お前の身体温かいな」

こちらを覗き込む彼の目と私の目が重なった。温かい・・・？それは、あなたのことだ。

「・・・・・・本当に温かい・・・。生きてる人の温かさだ・・・。」

心地よさに身をよじって作った距離が縮まる・・・。

いつの間にか、抱きしめられていた。でも私はこの温かさを離れたくなかった。そして私もこの温かさを抱きしめる。

「ほんと、何もしないから・・・。」

頭のとっぺんに、やさしい振動と、温かい吐息を感じながら、いつ

の間にか私は夢の世界にいた。

「きてたんだ。」

「お風呂沸いてるよ？食事はどうする？」

あれから彼は本当に抱きしめる以上のことをせず私を一晩中暖めてくれた。

そして、その温かさと心地よさに味を占めた私は休みの前日は度々此処に通うようになっていた。

そして、友達以上、恋人未満の、生ぬるい関係が続いている。都のいい加減にしなさいね？と言うため息とともに。

「おかず何？」

「んんんホイル焼きと、味噌汁、ヌタと冷奴。」

「風呂入ってくる」

もう時刻は日付けが変わろうとしている、ホイル焼きを焼いているとお風呂から声がかかる。

「お前は食べたの？」

食べた、と風呂場に向かって答える、ビール付き合っ？ときかれ、だしとくねと答える。

「んんんあうまい」

当たり前のように私の隣に座り私を抱きしめるように抱えながら、彼はビールを飲んだ。そして、私の肩に顔をうずめながら、美香のにおい良いにおいとたたまう。

いやいやいや、ちょっと引っ付き過ぎでしょう……。内心突っ込んでみるが、この2ヶ月それ以上手を出さない彼を信用している

私は黙ってされるがままにしていた。

ビールを飲みながらホイル焼きをつつき、彼は言った。

「おまえ、E Rの教授と知り合いか？」

首を回し、彼の顔を見ながらいわれた言葉の意味を考える。

「今日、肝破裂の患者のエンボリを頼まれたんだ、そのとき、教授もいてな？　・お前に手を出すんなら自分の許可を取れと言われた。」

「・・・・・・・・・・。」

「この世で一番大事な娘だから、中途半端な気持ちなら覚悟しろよ、とも言われた。」

「・・・・・・・・・・。」

「縁戚関係でもなかったよな？」

私の顔をちらちらと伺いながら、言葉が続ける。ただの知り合いにしては、真剣に言われたぞ？　ちよつとびびったかな？　・・という彼のため息を聞きながら、まだ気にかけていてくれたんだ・・まだあの人の中でも終わってないんだ・・と私は身を硬くした。

「？　ごめん？　なんか気に障ったか？」

私の変化に気がついた奴は、あわてた声で私に言った。

「なんでもない。何もない。」

質問の答えになっているような、ならないような返事に、彼はそれ以上の質問をせずに黙って食事を再開した。

食事を終えて、飲み足りないのか、私の隣でもう一本ビールのプルタブを引いている彼を私はボーっと見ていた、時刻は2時を過ぎようとしていた。

「まだ、寝ないの？」

ああ、今日は気になることがあったから眠くない・・　こちらを見ずに返事を返す彼の横顔を見ながら、わたしは、言葉を選びつつ話し始めた。

「・・・昔のね・・・知り合いが、楨原教授の下で働いていたの・・・。そのときの何回か、マッキーにはあったことがあるの。私が高校生のときだから、もう、12年になるのかな？昔は、あんなに怖い人でなくて、優しいおじちゃんだったんだよ？」

彼は私の顔をみて眉をしかめながら・・・お前仮にも教授に向かつてマッキーてなんだ？・・・とあきれた声で言った。

「だって、就職してから会ってないし、私の中では、12年前のマッキーの顔しか思い浮かばないもの。私がつけたんだよこのあだ名？かわいいでしょう？」

微笑む私をビールを飲みながら彼は見ていた。私は言葉を続けた。

「12年もたったんだあれから・・・。私もうすぐ30になっちゃうんだよね。」

お前それはいきなりでしょう？まだ、20台でしようと彼が苦笑いしながら言った。

「・・・ううん・・・あの時はまだ、16だったんだ。覚悟も何にも出来ていなかったんだもの、どんな言葉が相手を傷つけて、どんな言葉を伝えたら良いかもわかってなかった。だからあんなことになっちゃったんだ・・・。どんなに後悔しても時間は戻らないよ・・・ね？」

お前酔ってんの？と 居心地が悪そうに彼が言った。それなら今から謝れば良いじゃないかとも・・・そして、なんなら俺と一緒に言ってみようか？などととぼけたことを言う。

「もう、無理なんだ・・・。謝れないのよ。」

横にいた彼にゆっくりと抱きついた。

「あなたは、温かいよね・・・。とっても・・・。こうしているとほっとする。」

抱きついて、胸に顔を摺り寄せる私を、彼はそっと抱きしめてくれた。そして、ゆっくりと背中をなでてくれていたが、そのうちに、

なぜか身をよじった。・・・あれ？

「・・・・・・？ねええ？・・・・・・」

「・・・・・・言うな・・・・・・」

「・・・・・・何か、異変が起きてませんか？」

「だから、口に出すなって！！！」

真っ赤になってうつむいている彼の顔を、私はまじまじと見つめた。

「治まりそう？トイレに行く？疲れているんじゃないの？何でこんなに元気なの？」

「お前には、男の生理を理解して、さり気無く恥らう気遣いはないのか？」

「・・・・そんなん、6年も看護婦して、28年生きてきた私に求めたって無理よ？まさか、私に収めるのを手伝ってくれなんていわないわよね？手でも、口でも遠慮させてもらおうわよ？」

「・・・・おまえこないだまで・・・本当にバージンだったんか？・・・」

「あんたが、無理から奪つといてよく言うわね」という台詞から逃げるように、彼はトイレに向かっていった。よしよし、自分で何とかしてください。」

「・・・・あんたって、鬼ね・・・・。」

都の冷たい視線を無視しながら、事の顛末を都の部屋で飲みながら私は語った。・・・・。

「ホンで、あいつを煽るだけ煽って挙句、好きな女に擦り寄られて欲情したあいつのぶつを冷静に観察して自分は後始末せずに相手にさせたんだ。」

「・・・なんか、都の言い方ヤダ・・・身もふたもないじゃん・・・」

「その状況を、どう脚色しろと？」

「まるで、私がろくでなし見たいじゃん」

「ろくでなし以外のなんだと言うんだ!!!? 充分ろくでなしだよ？ あんた男心を弄ぶのはいい加減やめろよね？ どうせ、バージンささげた相手じゃない？ いまさらでしよう？ させてやれよ!!!」

「だから、身もふたもない言い方やめてって。それに、捧げてない、奪われたんだって!!!」

都は、キッツ!!!とこちらをにらみつけ言い放った。

「休みの前日にしょっちゅうお泊りに行ってるくせに今更だよ!!! あれから、やってなかったなんてびっくりするわ!!! あいつのヘタレ具合と忍耐力に拍手喝さいだね!!!」

「だから・・・そんな関係じゃないって・・・。」

まだ言うか!!! じゃあ、あいつにかまうな!!! きっぱり切って捨てろ!!! 奴のために!!! それが本当のやさしさだ!!!」

都の剣幕に私は黙り込んだ。そうだ、都の言うとうりだ。わたしは、彼の温かさと彼の優しさに甘えて、優ちゃんにあえない寂しさを埋めようとしている。

「ねえ？ 美香。」

打って変わってやさしい口調の都の顔を見上げた。

「思い出は捨てる必要はないけれど、思い出はあんたを暖めても抱きしめてもくれないんだよ？ 今一番大切な人は誰か本当はもう分かっているんでしょう？ このままだとあなた、また後悔するよ？」

ひざを抱えて円くなりながら都を見つめた。

「でも・・・やっぱり、わたしは、優ちゃん以外の人のお嫁さんになれない。だって、約束したんだもの。」

私は都の、あきれたようなため息と、ドンだけすり込まれてるの？ こんなん置いていってほんまに罪な男だよ・・・というつぶやきを黙って聞いていた。

はじまりのはじまり（前書き）

血は出てきませんが、事故の処置のシーンがあります。・・・苦手な方ゴメンナサイ。

はじまりのはじまり

私は、夜勤を終えて帰宅の準備をしようと詰所をでた。

「ああ、中野さん悪いけれど帰る途中で良いから、これ急外に返してくれる？」

使うからと取り寄せた器具が不要になったからと師長にことずけられた。ロッカーに行く途中だから良いですよと荷物を受け取りERへむかった。

ERは喧騒の真っ只中だった、

「中野さん！よい所にきてくれたわ手伝って！！！！」

構内を出たところで事故があり、巻き込まれた歩行者が心肺停止状態で運び込まれたらしい、ホットラインは鳴らず、救急隊の独自の判断で搬入してきたので、人手がないとのことだった。

「右側から軽自動車に当たられてます。そんなにスピードは出ていなかったようですが、当たるまで運転手は気づいてなかったようです。最初呼吸は浅かったですがありました、右の呼吸音が減弱していました、腹部の打撲痕、骨盤の痛みが見られました、そのうち呼吸状態がおかしくなったので補助換気したら、急にバックマスキの抵抗が出て心肺停止になって。」

若い隊員の説明を聞きながら患者の視診、触診、聴診を続ける奴がいた、

「竹沢、ルートにとって、取れなかったら骨髓路で良い。本田、右緊張性気胸の可能性がある緊急脱気しる場所分かるな？右側だぞ。」

婦長さんオペ室に連絡してくれますか？右側から軽自動車に当てられ、骨盤骨折、腹腔内出血の可能性の患者がいる。カテも同時にするって、止血がいるって、腹部外科と整形にも同様に伝えてください。念のために胸部外科にも声かけて必要だったら呼ぶって言っと

いてください、血型調べて血を手配して下さい、本田脱気出来たか？出来たらオペ室に移動。」

次々と指示を出しながら、研修医の手元を見ながら処置と一緒におこなっていた、でも、私は、処置台に乗せられたその若い男の人と12年前の思い出が重なって足がすくんで動けなかった。

そんな私を見て奴が叫んだ、

「中野！ガウンつけて手伝って」

でも私は動けなかった。

「美香！！お前の職業はなんだ！！」

こちらを、まっすぐな瞳で見ている奴を見つけて、私はわれに帰った。

「そうかん準備します。」

頼む、と奴に肩をたたかれ、私は救急カートに向かった。

処置に反応し、患者はオペ室へ向かった、時計を見たら、まだ此処についてから30分もたっていなかった。もっと過ぎていると思ったのに。

「助かったよありがとう。」

こちらに、笑顔を向けながら奴が向かってきた、その笑顔をボーと見ながら私の回りは、暗くなっていった。

「・・・美香・・・」

ダレカガヨンデイル

「美香」

心配そうに覗き込んでいる奴がいた、ありがとう助かった、お前本当に外傷嫌いだね、巻き込んで悪かったな？ 彼に本当に済まな

さそうに謝られた。当直室のベッドに寝かされていた。

「あの人・・・どうなったの？」

「今のところ助かると思う、処置が早かったし。」

でもいきなり搬入は勘弁して欲しいよな？と彼は頭の後ろで腕を組みながら言った。そしてこちらに視線を向けていった。

「槇原教授にしかられた。」

「・・・？」

「内科しか経験のない部外者に無理やり手伝わせて、患者増やすな・・・って」

私は、ベッドの上に起き上がりひざを抱えて笑った。

「他に何か言われた？」

ううん・・・まあ・・・と歯切れの悪い返事を返した後、彼は 私の顔を覗き込みながら言った。 今日来るか・・・？と 無理にとは言わないけれども・・・とも言った。

「ワイン ロゼ冷えてる？」

こちらを見てにつこり笑って、かって帰れば良いき、僕が帰るまで仮眠してて？ テイクアウトのイタリアンで良いか？ときかれて、私はうなずいた。

彼のマンションで、テイクアウトの夕食を食べながらワインを飲んだ。

「隣に座らないの？」

私が聞くと苦笑いしながら彼は、この前のことがあるから今日はやめとくと神妙な顔で返す。 気にしてたんだ？と私が笑うと、当たり前だろう・・・と真っ赤になって、向こうを向いた。

そんな彼の横顔を見ながら私はゆっくりとはなしはじめた。

「産まれたときからそばにいてくれたんだ。」

・・・え？と彼がこちらを見た。

「隣の、12歳年上のいとお兄ちゃん。中学2年の夏にプロポーズされて、高校卒業したら結婚する約束をしたの。でも結局、事情があって、16の誕生日に籍は入れたの。中野は彼の名前。私の旧姓は橘。」

・・・なんだそれ？ロリコン？下を向きながらボソリと彼が言った。「うん、自分でもロリコンだねって言ってた。でも、美香がもし他の奴に取られたら悔しいから早い目にマーキングするんだって言ってた。」

「優ちゃんはね、マッキーの下で働いてたんだ。だから、榎原先生とは何度もあってる。結婚式にも来てもらう約束していた。」

・・・彼は、下を向いたまま黙って聞いていた。

「籍は入れたけれど、卒業までは何もしないって約束だったのに、その夏に、旅行に誘われたの。けれど怖くていけなかったの。何もしいって言ってたけれど信じられなくて・・・終いに喧嘩別れたの。」

・・・彼は下を向いて無言で聞いていた。

「彼が一人で出かけたその日、クラブ活動していたら、お母さんが来て・・・」

両手を握り締めた、

「救急医してたのにね、自分が事故で死ぬなんて思ってなかったろうね。」

声が震える・・・涙が止まらない・・・。

「もういい」

いつの間にか隣に来た奴に息が止まるほど強く抱きしめられた。

「俺はそばにいる、どこにも行かない、俺じゃ替わりになれないか？」

アナタハオニイチャントハツガウ、ミカヲアタタメテクレル・・・

アナタハアタタカイ・・・。

「・・・・・・・・温かいね」

私の独り言で彼の腕にますます力が入るのを感じていた。抱きしめられたまま時間がゆっくり流れていった。

「・・・・・・・・いいか？」

かすれた声で彼が聞いてきた。私は顔を上げずにうなずいた。

温かさに、ゆっくりと彼の重みが加わっていくのを、全身で感じていた。

理想と現実との折り合い（前書き）

医療関係の話が続きます。

一つの考え方・・・と思って読んでいただけると、ありがたいです。
だいぶ、シリアス。・・・長いです。

理想と現実との折り合い

最近、彼の勤務時間は殺人的である。

ERの榎原教授に目をつけられたこともあり、何かといっではお呼び出しを受けており多分殆んど寝ていないのではないだろうかとも思う。

だからといって担当の入院患者が減らされるわけでもなく、本当に出来る人ほど仕事が増えてしまうこの体制はぜひ改善すべきだと、一人憤慨していた。

日勤終了の、5時過ぎにやっと彼は病棟に顔を出した。今日新入院を持ったはずなのに、診察は出来ず、ルーティーンの指示のみ電子カルテで出していた。

「山下さんの息子さんが先生はまだかつて・・・」

入ってきたばかりの彼に、若い看護婦がいいにくそうに言った。今日の入院患者の息子だ。もう、98になる母親に、少々マザコン気味のきらいがあるというか・・・寿命・・・ってなんだったろうという勢いで、延命にこだわる。

「ムンテラするから呼んでくれるかな？」

判ってるよありがとう、と言わんがばかりの笑顔に向けてやさしく微笑む。くうううその笑顔私にもくれっ！！最近まともに会話してない・・・。

やがて、山下さんのご子息が詰所に入ってきた。彼は向き合って、病状説明を始めた。

「肺炎を起こしています。レントゲン像から誤嚥性だろうと推察されます。食事は胃に直接入れたチューブから取られているので、肺炎の原因は、ご自身の唾液を飲み込むことが出来ずに、肺のほうに流れてしまったのが原因かと考えられます。ご高齢なこと、栄養状態のこと肺炎の原因を考えると非常に厳しい状態ではないかとおもわれます」

息子は、はんかちを握り締めていった。

「入院期間はどの位になりそうでしょうか？」

彼は、それはいつ退院できるかと言う事ですか？と聞きなおす。

「これ以上認知が進まないように、なるべく早くつれて帰りたいんです」

彼は、ゆっくりと息子に告げた。

「非常に残念ですが、予断を許さない状態です。いつ何時急変されてもおかしくはありません。合わせたい方があるなら早い目に連絡してください。」

息子は、目を見開いていった。

「それは、入院期間が長くなるということですか？」

彼は、息子の目を見て静かに言った。

「残念ですが、お母さんは非常に高齢で、現在の医学ではこれ以上の治療は難しいということです。たとえば機械で延命を図ったとしても、機械から離脱するのは非常に難しいと思われます。そのためにかえって、しんどい時間を長引かせるだけになる可能性も有ります。」

息子は椅子から立ち上がり叫んだ！！

「やめてくれよ先生！あんたたちが見放したら俺たち素人はどうしたらいいんだ？無責任じゃないか！何とかするのがあんたの仕事だろう？」

「残念ですが、僕の知っている限り、お母さんに施せる治療は非常に限られ、また殆んど効果のないものばかりです。そして僕の見限り僕が感じるのは、お母さんに必要なのは延命治療ではなく横に座った家族の温かいぬくもりを感じるのだとおもいます。」

息子は、まったく奴の話を聞かず、母は女でひとつでしてくれしたこと、苦労ばかりかけてまだまだ長生きして欲しいこと、目見放すようなことはして欲しくないこと……。どんな姿になっても行き続けて欲しい事・・・を延々と喋りつづけていた。そしてそれを彼は黙って聞いていた。

「・・・あ・・・来てたんだ」

「食べるものだけ作っと思うって」

日勤を済ませて、食料を冷蔵庫にストックしようと彼のマンションをたずねていた私は、思わぬ早い帰宅にびっくりとした。

「早いね、まだ8時だよ？」

「風呂と着替えに帰ってきた。おまえこそ明日日勤じゃあなかったけ？めずらしいな、やすみじゃないのに」

「疲れているだろう恋人の体調を心配して、食事を作りに来ちゃだめ？」

ちよつとびっくりした顔をしたその後、夕方詰所で見た笑顔を3倍にした極上の笑顔を私に向けて、私のほうに手を伸ばしながら、ありがとう嬉しいよ。といった。

お風呂に入った後に夕食を食べさせて、夕食のかたづけをしながらリビングを見るとクッションにもたれて、うとうとしている彼がいた。

「寝るんだったら、ベッドに行ったら？」

「いや、山下さんが気になるし、病院に戻る」

私は顔をしかめた。

「老衰につける薬はないってやってやればいいのに！！」

「それは、俺たちの考え。患者家族の思いとは別もんだろう？」

おまえそれ患者にいうなよ？と苦笑いしながら彼は言った。

くうくそれは分かってるって、でもこのままだとあなたのほうが倒れちゃうよ？という私の訴えが心に響いたのか、それとも本当に疲れたのか、彼は当直医に電話をして今日は疲れたのでもう行かない状態が変わったら何時でも電話して欲しいと伝えていた。

そして、そのまま本当にすぐに寝てしまった彼の寝顔を見ながら、私も眠りについた。

詰所の中に罵声が響いていた。

「何で今日明日なんて言いかたしながらおまえがいないんだよ！！」

罵声の主は山下さんの息子。そして怒鳴られているのは彼だった。入り口で唾然としている私にきずいた都は私の手を引き、詰所内の休憩室に連れ込んだ。

「何があったの？」

「昨日の23時に山下さんが急変して、息子はちょうど自分の荷物を取りに病室にいくつて、夜勤者は日置呼ぼうとしたんだけど、当直医が岡ちゃん、呼ぶ必要ない俺が責任とるつて言つて、結局奴は挿管も出来ずこの騒ぎ」

それつて……

「……レスピ希望したんだ」

「うゝゝん、日置は乗り気じゃなかったから、もう一度よく考えてくださいつて保留にしてて、岡ちゃんは年齢とプロフィールみて必要ないつて家族と話もせずじに決め付けてたんだけれど……、息子さんに何とかしろつて言われてあわてて……おまけにアイツは挿管経験少ないし失敗して、ますます挿管困難になつて……」

「それで主治医に連絡もせずじ？岡ちゃんてアイツの上だつて？」

「そうそう、まったく使えない8年目、ローテート先からも早々に放りだされてたからね。役に立たなくても先輩つてのが辛いわよね。」

怒鳴り声はまだ聞こえていた。患者の権利と人権について叫んでいる。何をふざけたことを言っているんだろう？じゃああなたは医者に過労死しろと言うのか？手のひらに余る命を救うために彼がどんなにがんばっているのか見ていないからそんなことがいえるんだ。私はこみ上げる怒りに震えていた。止める都を押し切つて、反論するため詰所に出ようとしたそのとき。

「あんた、寿命って知っているか？」

ちーちゃんだった、そういえば前回入院のとき、山下さんと病室が一緒だった。

「あんたのお母さんが本当にあんたが希望するように、生きるってことにこだわっていたと思うのか？」

ちーちゃんが山下さんに諭しているのが聞こえた。

「口から食べられず、管を無理やり胃に通されて栄養を取って生かされているそんな生活をあんたのお母さんは自分からして欲しいって言っていたのか？」

「お母さんが、生きる事にこだわっていたのか？ あんたが生かすことにこだわっていたのか？ どっちかな？」

「あんたが、やさしいこだって言うのは知っているよ。だって見たからね。」

ちいちゃんは静かに続けた、

「でも、もし私なら子供のエゴで生かされるなんて真っ平ごめんだね。」

「あんたは、ほんとうにあんたのお母さんが延命を望んだと思っ
て言っているのかね。」

山下さんは黙ってちいちゃんの言葉を聞いていた。そしてしばらく考えた後、彼に向かってお世話になりました。失礼しました。・・・

といって去っていった。

山下さんの息子が帰った後、都はちいちゃんの手を握って、ありがとうって言っていた。ちいちゃんは、にっこり微笑んで、真のほうを向いて

「どうじゃ？ぐらつと来たかの？あんたに対する愛情ならあの小娘に負けんぞ？今からでも遅くないと思うがの？」

うなだれながら椅子に座っていた彼は啞然とした顔をちいちゃんに向けていたが、いきなり笑い出した。

「ものすごく来ましたよ。ありがとうございます。」

彼の言葉に満足そうな笑みを浮かべて、ちいちゃんは休憩室の入り口にいる私をみてふふんと鼻で笑った。

私は、その日彼のマンションで、彼の帰りを待った。

「……きてたんだ。」

おかえりなさい……と、微笑んだ私に、複雑そうな笑顔を返して彼は言った。

「……今日は、独りになりたいんだけど？」

夕食をテーブルに並べる私を見ながら、彼は重ねて言った。

「まあ、たべたら？さめちゃうわよ？」

彼の言葉を見無視した形の私の発言に、ため息をつきながら彼は腰掛けた。手を合わせて食事を始めた彼に私は声をかけた。

「……ビールだそうか？」

こちらを見ようともせず、に、いらない……と答える。

食事を終えた彼の隣に私は腰掛けた。彼は身をよじり少しずれて距離を置こうとする。

「……きてるね？」

「……そうだな」

「あなたが悪いわけじゃないでしょう？神様の領分じゃないの？」

ゆつくりと、こちらを見据えて、再び下を向いて彼は言った。

「・・・疲れてたからって、家族が納得できるまで話し合いをせずに放り出していたのは、俺の責任だ。ちーちゃんが助けてくれなければ、まだ山下さんは納得できなかったかもしれない、レスピに乗せてたとえ離脱できなかったとしても、山下さんの息子さん自身にそれを見せて、ご自身で考えてもらうのもひとつの方法だったと思うんだ。でも、結局あのとき疲れていたことをいい訳にしてそれを提案しなかったのは、俺の問題だ」

「・・・あの、マザコン男がそれでも納得しなかったら？」

「それは、言い逃れの推論だ。俺が、山下さんの息子さんがうけられるように、全力を尽くさなかったことに変わりがない。」

「・・・それを、あなたにかかわる人全員にあなたがしていたら、あなたつぶれちゃうよ？」

分かっているよ、力量不足だってことは・・・頼むからほっといてくれないか？・・・と彼は自分のひざに顔をうずめながら言った。

むうう・・・。聞いていてむかむか怒鳴りたくなった私がいた。完全主義のヘタレっつ！？自分のキャパシティ以上のことを自分に求めるなっつ！・・・イカンイカン、ここでこんな事を叫び、けんかしたら、彼にますます追い討ちをかけてしまう。今日は彼の言う通り帰った方が良くかもしれない。

食べ終わった食器類をかたずけて、風呂に入れるよう準備した。荷物をまとめて、おいとまする旨を伝えようと彼のほうを見た。

・・・小さくうずくまり、一人で自分を抱きしめている彼の姿が見えた。・・・

？ワタシハナニヲシテルンダロウ・・・ワタシハナニモノナンダロウ・・・？

甘えたいときだけ彼を利用している私。

激務の中でも、患者や家族と向き合いすべてを受け止めようと努力し、自分を取りこぼした思いを、自分がふがないせいだと、自分をせめて打ちひしがれている彼。

彼の何を見ているんだろう。

彼のこんな時に自分を責めるばかりで回りの助けを求めようとしな
い不器用なプライドを尊重し一人にして良いんだろうか？
わたしは、彼のそばにひざまずいていった。

「・・・帰るよ？・・・本当に帰っていいの？」

顔も上げずに彼が、ああ・・・と言った。

私は、彼を包み込むように抱きしめた。

「なに、がんばっているの？あなたのヘタレ具合は、しっかりばれ
ているよ？私は貴方の弱い部分も、へたれた部分もすべて好きだよ。

」

彼は、やっと顔を上げてこちらを見た。なんだ？お前からのいわれ
具合だと、俺って救い様なさそうだな？と、笑った。

そうだよ？知らなかった？私は知ってたけれどね。でもそんなあな
たもすきなんだよ、私の台詞にゆっくりと唇を重ねてきた。

「でも本当に、今日は帰って。お前がそばにいたらお前を抱いてし
まう。でもこんな気持ちでお前に触れたくないんだ。」

「私は、今日はあなたを抱きしめて寝たい。それ以上のことはさせ
ない自信はある。いちや駄目？」

お前の守りは鉄壁だもんな。・・・と笑いながら風呂に入ってくる。
と彼は言った。

そして、彼は私の腕の中で私に抱きしめられながら眠りについた。

山下さんの息子さんからお礼の手紙とお礼のお菓子が詰所に届いていた。ちいちゃんにも面会して頭を下げていたらしい。

ちいちゃんの言葉も有ったと思うが、私は、彼の思いも伝わっていたとも思いたい。

「10年たつたらもつとキャパ広がってるだろうね。」と私が言う
と。

「10年たつたら違うイベントが発生してるだろうね」と、あいつ。

お菓子をつまみながら、彼は淡々と返してきた。何であなたが、看護婦休憩室でお茶してるんだ？こら、勝手にカップ出すな、コーヒ
ーいれるな！

紅茶はないのか？と勝手に棚を物色している彼の後姿を見ながら、
心の中で突っ込んでみた。

「その時イベントに負けてヘタレない根性を身につけて頂戴」

私の台詞に彼はにっこり微笑み、

「そのときはまた一晚中抱きしめて慰めてもらうから良いよ」

と、のたもうた。ここは職場じゃ！！！！しかも休憩室じゃ！！！！真
っ赤になって口をパクパクさせてる私を無視して、入り口から入っ
てきたスタッフに、すみませんお茶いただいてます。と 涼やかな
貴公子のえがをを振りまいていた。

しょうがない、何時でも抱きしめてあげるよ……。

その事件の後から、休みの前日だけでなく時間を作っては彼のマン
ションに通うようになった。

めんどくさいからここに荷物を移したら？ という彼の提案に、

でもすぐにはうなずけない私もいた。黙っていると、なんともいいえない顔で無理にとは言わないよ・・・、とかえされて胸が疼いた。何で思い切れないんだろう、優ちゃんの笑顔が浮かぶ・・・。

・・・・・・ゴメンナサイ・・・・・・。

次へのステップ

世間はいわゆるクリスマスと言うイベントにさしかかろうとしていた。

世間一般の常識？にはずれることなく、クリスマスプレゼントをリサーチしてくる彼をのりくらりとかわしながら（だって、宝飾店に誘うんだよ？いい機会だからとかいいながら・・・。）私は日々の生活に追われていた。

休みをあわせて、珍しく外で映画を見る約束をした。甘あまの恋愛ストーリーを希望する彼の提案を却下し、アクションホラーを目指す。開演まで時間があるので、隣の店を覗こうと連れて行かれた先は、いわゆるジュエリーショップだった。

「・・・何しに行くの？」

「クリスマスプレゼント、この間雑誌見ておまえが欲しいって言ったネックレスがこの店においてあるんだって。」

・・・なんで、宝飾品の売り場の品揃えをこいつが知ってるんだ？しかも人の行動をよく見てるよね？怪訝そうな顔をしている私に、彼は、

「実物見て、気に入らなければやめればいいし、見るだけならいいだろう？」

彼の言葉に、もっともだと思い直し、あのネックレスの値段を思い出しながら促されて店に入る。

店の中は、クリスマスの飾り付けで華やいでいた。

「いらっしやいませ」

笑顔の店員に向かって、彼はネックレスの特徴を伝え案内を頼む。にっこり微笑んだ店員が、私と奴を促すように奥に設けられたクリ

スマス用の特設コーナーに案内する。

「ご希望のものはこちらにあると思うんですが。」

店員に促されて、ショーケースを見ると、あった。あの時雑誌に載っていたネックレスだ。でも、名のとうったブランド物のそれは値段もそれなりだった。

「どう？」

いつの間にか、隣にたって肩を抱いてきた彼の顔をみながら、私は、ためらいがちに口を開いた。

「どうって・・・素敵だとは思いうけれども・・・ねえ・・・」

私のためらいをきずいてないのか、無視しているのか、試着可能ですか？と彼は店員に言った。・・・いやいや、そんな簡単に着けさせてくださいって言う値段じゃないし・・・。

店員はそんな私をまったく無視して、彼にネックレスを渡す。彼は私の後ろに回りこみ強引にネックレスを止めた。前に回り私を見て満足そうに言った。

「よく似合ってる、これでいいか？」

いやいやいや、お兄さん値段ちゃんと見てますか？桁見間違えてませんか？

たじろいでいる私に苦笑しながら、店員にプレゼント用でといっている彼がいる。！！！！だから！！！！桁を見間違えてませんか！！！！

そんな私をまったく見ずに店員はここぞとばかりに彼にセールトークを繰り広げる。

「実はクリスマス限定で同メーカーから、ネックレスに合わせたリングもございまして。」

へっ？？リング！？

「石はダイヤモンドでクオリティもちろん絶対の自信を持ってお勧めできます。単体でエンゲージとしてお買い求めになれる方もいらっしやるんですよ。」

興味深そうに奴は耳を傾ける。現物はあるの？と言う彼の声に（や

めてくれ!!!) 私は逃げ腰になる。

「こちらになります」

逃げようとした私の手をつかみ、彼は引っ張った。店員の出してきたリングを仕方なく見る。ううう、ほんとだかわいい、私好みだ。でもエンゲージ?

「サイズ調べられますか?」

いやいやいや、いらないし、しないし、やめて頂戴。彼の台詞に首を振って抵抗して見せたが、俺に恥をかかせるのか?という無言の圧力に屈する。

「まあ、よくお似合いですわ」

いや、やめて頂戴、これを受け取る心の準備が私にはまだない。泣きそうになってる私の顔を見て、彼はため息をつきながら店員に今日はやめときますと言った。取りおきたしましょうか?と言う店員に貴公子の笑顔を向けながら近いうちに来ますから良いです。と返していた。

ほっとし脱力中の私に彼はため息をつきながら言った。映画始まるよ、行こうか・・・と

衝撃的なイベントのせいで映画の内容は殆んど覚えてない。夕食どうする?ときいてきた彼の言葉に答えあぐねていると、彼の携帯が鳴った。

「・・・はい、はい、レントゲンとって当直医に診察してもらってください出来れば血液ガスと一般採血も出しておいってください。僕もそちらに向かいます。」

彼は患者さんの血中酸素飽和度が上がらないらしいちょっと病棟に顔を出す夕食はこの次にねといいながら私を軽く引き寄せてほほに唇を寄せる。いやいや公衆の面前だしここ!!!思わず身を硬くする私に笑って、じゃあなまっすぐ帰れよと言った。

小走りで横断歩道を渡りひとごみにまぎれていく彼の後姿を私はそ

の背中が見えなくなるまでずっと見送っていた

・
・
・
・
・
ゴメンナサイ
・
・
・
・
・
○

引き止めるもの

「それで、私になんと言って欲しいのかな？」

一人の部屋にかえるのがいやで、都の部屋を訪れた私はことの顛末を都に相談していた。

「……どうしたら良いんだろう？」

「……………あほかっ……………都の罵声が部屋に響き渡る。ここは野中の一軒家じゃないんだから、もう少し小さな声で……………。そんな私の心の声が聞こえたのか、こちらをにらみつけながら低い声で都は言った。

「あのな、20、21、の小娘が”いや〜ん♪彼に意味深なこと言われちゃった〜ん♪”てのと訳が違うんだよ……………成人女性のクリスマスなんか、高値になるのはその当日まで……………年末大売出し中であんたが、買ってくれる奇特な人をここで見逃したらどうするの？我々には、新春大売出しは当てはまらないんだよ……………あんたの後ろはがけっぷちな……………！！本当にわかってるの？いいやつ……………！……そのことこのまま腐ってしまえっ……………！！」

「……そこまで言わなくても良いじゃない、と心の中でつぶやきつつ、目をそらしながら都に反論する。

「歳末大売出し中なのはあんたも一緒じゃないの……………？。」

きつと、こちらをにらみつける都におびえて小さくなる。

「歳末じゃない……………！！年末……………！！私は今は結婚する気がないから……………！！……………！！」

分かったような分からないようななどっちでも良いようなよくないような、訳の分からない都の怒りに、私が悪うございましたと謝ってみる。

「ほんとに……………？！ほんとに悪いと思ってる……………？！なら……………！奴に今すぐ電話して指輪が欲しいと言ってみろ……………！！」

いやいや、その話 論点ちよつとずれてる……………し……………。

「ずれてない！！でなかったら、奴が次に行けるように切ってますろっ！！男は30からだって言うけれど、アイツは32じゃないか！！足掛け7年も振り回せば充分でしょう？！」

「でも付き合ってたまだ半年だし……」

「阿呆！！だから、自分が歳末大売出し中の身分だって言う事忘れるな！！時間は止まってくれないんだこうしてる間にも刻々と過ぎていくんだっつ！！ぐずぐず言ってる場合じゃないって！！！」

「……年末じゃなかったの？やっぱどっちでもいいんじゃない？」

「うるさいわ！！！」

何で私の心の声が都には聞こえるんだろうという、私の驚いた顔に都は、あんたの考えなんて顔を見たらただ漏れ出し……、とため息をついた。

「……別れることは、考えてないんでしょう？」

都の言葉に私は返事が出来なかった。でも、このままじゃいけないことも分かっていた。

「はじめは……、つけないとね。」

都は、びっくりした目で私を見つめ、そしてため息をつきながら首を振った。

そして、その後私たちの間でそのことに対するそれ以上の会話は無かった。

翌日、都が会議から詰所に戻ると、ヘタレの友人の、ヘタレの彼氏が、ヘタレながら電子カルテに所見を打ち込んでいた。他に人影は無い、音を立てずにそつと後ろに立ち首に両手をかけた。びくつと肩が動き恐る恐る後ろを振り向く彼を見ていた。

「……おまえ、それ、何の合図だ？」

横に腰掛けて周りを見回しながら、あなたに心情を表してみました。と都は笑いながら言った。そして続けた。

「聞いて欲しいことがあるなら夕食で手を打つわよ？」

・・・ああ、とカルテを見ながら彼は答える。

「昨日の今日で情報早いな？」

だってテレパシーでつながってるもん。という都の台詞をスルーして彼は、30分後西口駐車場と答える。

いや！正面玄関に迎えに来て。・・・という都の台詞に、お前どこの女王様だよ？　じゃあ40分後正面など、キーボードを叩きながら返す。

詰所の入り口から美香が車椅子のちいちゃんを連れて入ってきた。美香は今日は準深夜だ、それを見ながら都は少しあんたのへたれた彼氏借りるねと心の中でつぶやいた。

「うわーっ懐かしい車。まだこんなのに乗ってたんだ！！」

ぼろぼろの緑の軽自動車を見て都が声を上げた。

「・・・車まで手が回らなかったんだよ・・・。」

新婚用のマンション買ったものね？と都が茶化すように言った。

「・・・それに、買い換えるにしても、普通車にするか、ワンボックスにするか、悩んでいたし・・・。」

・・・だって家族が増えたら必要な仕様が代わるだろう？　と続いた彼の台詞に、あんたって本当にけなげね。と都がつぶやいた。それなのに、あの年末大売出しは・・・。とボソリ。

「指輪は婚約指輪のつもりだったの？それとも単なるプレゼント？」

「・・・この年で、あの年で、いまさらだろう？」

という彼の答えに、そうでしょうね・・・と都がつぶやく。

「まさか・・・解ってないわけじゃないよな？あいつ・・・？」

いっえ、いやというほど理解してましたよ。・・・との都の答えに、それはそれで、へこむよな・・・。とかれは答える。

「16年たす12年」

「・・・？」

あの子は16年優しいお兄ちゃんに”大事な大好きな美香”をすり込まれ、死んだ後も幻を見せられ続けたの。」

「・・・それに対して、たかだか半年の俺は分が悪すぎるってか？そうはいってないけれど・・・でもあの強力なすり込みは手ごわいと思うわよ・・・とやなことを言う。

「美香は、優ちゃんごとで美香なのよね」

意味がわからず、顔をしかめた。

「美香は美香だろう？亡霊が何を出来るんだ？」

あきれた顔で、都は俺の顔を見た。

「患者さんに対しては、気持ちを汲むのが上手なのに、当事者になると全然ね・・・それとも、嫉妬に目がくらんで目の前で何が起きているかも見えなくなってるの？」

俺はいらいらしながら返した。

「何の事だ？」

都は淡々と続けた。あんたのキャパシティの広さに期待するわ・・・と。

「はじめをつけたいてってわ」

「それは？・・・何に対して・・・？、誰に対してだ？」

さあ・・・それが分からないから困ってるのよね・・・と都は言った。

・・・ほんとに分が悪い、亡霊とどうやって張り合えというんだろうか・・・。

もうすぐ新しい年が来ようとしているのに、彼女と俺の時間はまた動かなくなった。

亡霊の後姿

彼は、年末年始奴、殆んど休みをとらずに働いていた。急変対応、病棟の当直、内科外来当直をこなし、ERの当直を押し付けられて、殆んどマンションには帰れず病院に寝泊りしているようだった。今までは、逢えなくても気になってマンションに通い食料を補充していたが、あのクリスマスの事件以来、私の足は遠のいていた。このままじゃいけないと思いつつも、答えを用意出来ないままで逢うのが怖かった。

昼休憩を取っていると彼からメールが来た、今日は早く帰れるので、逢えないか・・・と。マンションで待っているとメールを返した。

「久しぶり。」
リビングでいきなり抱きしめられた。

「ああ、美香のにおいだ・・・。逢いたかった・・・。」
抱きしめてきた彼の吐息が、肩と首にかかった。

「3週間ぶりだっけ？　そういえば、クリスマスにプレゼント渡してから逢ってないね。」

そういえば、私はプレゼントも渡してない・・・。
いつも、食事をつくってもらってるからいいよという彼の笑顔に、それも最近していなかった私は下を向いてしまった。そんな私を見て。

「げんきだった？　・・・って職場で顔をあわせてるし知ってるよね。」

一人でぼけて、会話の糸口をさがしていた。

・・・ケジメヲツケナイトイケナイ・・・。

言葉少ない夕食が終わり、彼が口を開いた。

「明日から実家に帰るんだろう？ 休みが取れたから、俺も一緒に行くわ。」

「・・・え？」

「休みとったんだ・・・俺も3連休、ついでに温泉に寄ってゆったりする？ それともどこか行きたい所ある？」

リクエストに答えるよ？ と笑いながらこちらを覗きこんでいる。

「・・・だめ・・・。」

「・・・え？」

「・・・駄目。」

なんで？ と私を見る。・・・シセンガ、ツキササル。・・・

「・・・一緒に来て欲しくない。・・・まだ会って欲しくない。」

視線をそらし、黙り込んでいる私になんで？・・・と聞く。

答えられない、私の気持ちをなんて伝えればいいんだろう・・・

「あなたの事は好きよ。大事にしたいと思ってる。でも私には忘れられない人がいる。」

彼が、言葉をつなげる。

「別に忘れなくても良いよ・・・。」

私は彼を見据えて言った、

「優ちゃんのことを私が思い出しているときに、あなたがどんな顔をしてるか知ってる？」

答えられずに黙って、彼はでていった。

2時の巡視を終え都が詰所に入ると、明日から3連休で彼女と旅行

に行くはずの彼が電子カルテの画面をにらみつけていた。

「何やっての？明日早いんじゃないの？」

「……」

「美香の家に挨拶にいくって言っていたじゃないの？」

「そのつもりだってけれど、……断られた。」

何言ってるんだろう……あの年末大売出しは……。それで、部屋にいられないから職場に来るなんて、あんたの行動範囲ってどうなのよ？と都はいった。

「……あんたもね、こんなところでへたれてる場合じゃないでしょう！？追いかけて、押しかけて、宣言すればいいのよ！！お前は俺のもんだって。！」

「うるさい！それで手にはいるなら、とっくにしている！」

見たこともない彼の剣幕に都がひるんだ。

「6年待った、ずっと見てきた。やっと手にはいったと思ったのに心が見えないんだ！！」

巡視から戻ったほかの看護師が遠巻きに眺めている、ここは職場だ、こんな話をする場所ではない、しまった。

「寝てきたら？ずっと寝てないんでしょう？」

「……すまない、大きな声を上げて……。他の看護師にも聞こえるように言って彼は出て行った。」

その後彼を、院内で見かけることはなかった。

院内の仮眠室で夜を過ごし、朝マンションに彼は帰った。

やっぱり一緒に帰ろうか、とはにかむ恋人の姿に少し期待しながら……。

でも彼を待っていたのは”ごめん”とかかれた1枚の書き置きだ

けだった。

「・・・はじめ・・・か。」

都から聞いたあいつの言葉。あいつははじめて、頑なに一緒になることを拒むんだろう・・・。婚約者がいたぐらいだ、別に結婚しないことにこだわっているわけでは無いだろう。

「むりさせてるのか・・・な？」

無理やり身体を奪って、彼女の優しさに付け込んで、その後ずるずる関係を強要している自分がいるのかもしれない。自分のわがままをこれ以上あいつに押し付ける前に、はじめをつけるのは俺のほうかも知れない。

「・・・はじめ、つけられるかな？」

美香のお気に入りクッションにもたれて、美香のにおいを探している、情けない自分をわらっていた・・・。

亡霊の後姿と 遺されたもの（前書き）

とても長いです。切りどころが判りませんでした。すみません。

亡霊の後姿と 遺されたもの

美香が帰って来る日、部屋で待っているのがいやで、院内で夜を明かした。

翌日、マンションに帰ると美香が来ていた。お土産あるよ。．．．とまぶしい笑顔で、迎えてくれた。何事もなかったように．．．。

「．．．きてたんだ。」

ご飯にする？お風呂沸いてるよ？とこだわりのなかったころのように声がかかる。

「．．．話がある、座って聞いて。」

声が硬くなるのが分かる、でも今言わないと、このまま一緒にすごしたらもういえなくなってしまう自分が分かっていた。

．．．．．しいぞうがいたい．．．．

なに？と心配そうな顔で聞かれた。

「．．．鍵、返して欲しいんだ。」

「．．．え？」

びっくりとしためがこちらを覗き込む。それは、別れたってこと？彼女のかすれた声が耳に響いた．．．。

．．．．．いきがくるしい．．．．．。

「亡霊とは、もうはりあえない．．．。」

彼女はうつむいたままだ。

「いつかは手にはいると思って、6年ずっと追いかけてきた・・・。やっと半年前に手にはいったとおもったのに心はそこになかったんだ・・・こんなことならただ見つめていただけたほうがまだましだった、苦しくてたまらない、もう疲れたよ。」

「・・・・・・・・。」

「どれだけががんばっても俺は一番にはなれない。大きな壁が邪魔して君に触れている実感がないんだ。もう俺には無理だ」

「いま、好きなのはあなただけよ・・・。」

俺は首を振った、

「生きてる人間のなかで・・・？ 君の中の亡霊と張り合っても勝ち目がないだろう？・・・おれは、君の中で永遠に一番ではないだろう？ いつまで僕は彼の後姿を気にしないといけないんだ？・・・それが俺にはもう耐えられないんだ。」

私の中から優ちゃんの記憶は消せないわ・・・と彼女ははいった。それは無理・・・と。

俺は、平行線だな、と言った。

彼女が亡霊を優先させる限り僕はどうかあがいても一番にはなれない。亡霊と張り合うなんて分が悪すぎる。

いつの間にか、ひざを抱えて俺は円くなっていた。・・・。

「たのむ・・・、早く出て行ってくれ。」

「・・・今までごめんね、・・・ありがとう、さようなら。」

ドアの音が聞こえた、あいつが出て行った音だ。顔を上げられずにどのくらい過ぎただろう・・・。

テーブルの上に、鍵を置いてへやをでた。

部屋を出る前に、いつの間にかひざを抱えて、円くなっている彼を見ていた。ああいつか見た光景　だ。あの時は、私が抱きしめて暖めてあげたのに・・・。もう彼はそれを望んでいない。

きっと誰か他の人に暖めてもらうのだろう・・・。

彼が、私の中の優ちゃんの記憶を否定する限り、彼とは一緒にいられない。仕方ないことなんだろう。でも、

イキガデキナイ・・・。シンゾウガイタイ・・・。

あの出来事から、数日がたった。私の感情とは関係なく、何事も

なかったように日々は過ぎていった。都にはちゃんと話し合ったらと言われて何度かメールしようと思ったが、何をどう伝えればいいのかわからない。優ちゃんとの思い出はなくならないし、それが邪魔であるといわれれば、きつと終わりにするしかないのだろうとやっぱりする。

つらくても、足元が崩れるような思いをしても、仕事はしないといけない。

夜勤中にナースコールがなった。ちいちゃんだ。

「……くるしい……しんどい……」

訪床すると小さな声で訴える。最近はA D Lも下がり、ベッド上の生活になっていた。

血圧はやや低く、脈が弱くて遅い、血中酸素飽和度も低い。ルーテイン指示の酸素を投与し12 ECGをとって当直医をコールした。「うーくん、どこといってどうとは……。年だし、びょうきがびようきだしなあ……。貧血が進んでるし、しんどいのはそのせいだろうし……。」

歯切れが悪い……。時計を見ると23時、主治医を呼ぶか？

一応、主治医に報告します。と、当直医に断り主治医に電話をした。5コールで奴が出て、返事をした耳元で聞こえる久しぶりの声……。

「西5病棟の看護師の中野です。」

「……何か？」

「江端さんが、全身倦怠感を訴えられて……。」「状況報告をつづける。後ろで、日置先生どうされたんですか？という女性の声が聞こえる……。？電話の向こうで、患者の状況が変わったので今から顔を出します夕食御馳走様でした、と言う声が聞こえる……。夕食？……。」

「今出先で一時間かかる。当直の先生と代わってくれますか？」
当直医にその旨を伝え電話を代わる。一時間？彼のマンションはここから車で10分・・・どこにいるんだろう？

電話を切った当直医が、私の名前を呼んでるのにきずかなかった。
われに返り顔を上げる。

「一時間で来るって言ってるし、今までの指示どおりで。維持液でルートとってキープで流して」

「分かりました」

おかしくなったら何時でも読んでくださいね・・・と当直医は出て行った。

ちいちゃんの部屋を、詰所の横の処置室に移す。部屋を移動するならしょうとう台の缶も持って行くと言う。指示どおり四角い缶を乗せて。ベッドを移動する。

消灯後なので、仕事は記録の整理のみだ。ちいちゃんのベッドサイドに座って、手を握った。

「しんどいところさそうか？」

「いらない、こうやっていてくれるだけでいい、仕事はええんか？」
あと記録だけだし大丈夫。って言うのにっこり笑う。

「真一さんとけんかしたんか？」

あいまいに返事をした。

「アノ人は、頑固ものだしな、わがままだし独占欲も強いし、彼女になったら苦勞するだろうな？」

そうなの？とびっくりしてみる。

そりゃあんだ、見てれば分かるよ・・・伊達に年はとってない・・・
とにっこり笑い、

「でも純粹で、一所懸命だ、だから融通が利かない。いろんなことを抱え込んで自分で処理しようとしてパンクする。」

目を見開いて見ている私に、ちいちゃんがウインクする。

「だからあんたみたいに、三本ぐらい線が切れて抜けてるのが、良

いんだ。」

「……それほめてますか？ちいちゃん。」

「お似合いだと思うよ、手を離しちゃイカンよ？」

仕方ないし譲ったあげよう……と笑いながら続けた。

「……デモ、モウオシマイニスタンデス。……」

うつむいている私のほほに手を当ててちいちゃんは続けていった。

「あんたは、幸せにならないといけないよ。でないと、あんたを置いていった人は天国でゆっくり出来ない、わたしも、あんたには幸せになつて欲しい。」

そして静かに涙を流し、ごめんねといった。

ごめんね？謝られることなんてされてない。何のことだろうと怪訝な顔をしている私に、もう大丈夫だから、仕事をしてきて私は少し寝るといって目を閉じた。

主治医であるあいつが来た。ちいちゃんのベッドサイドに行き少し話をする。そして、相談室で家族と話し合っていた。詰所に帰ってきて、カルテに指示を記入した。

” D N A R ”

「……え？」

「……本人家族の希望。今回入院のときに言われた。今もう一度確認したけれど、同じ答え。点滴抜いて、モニターはずして。」

「……出来ません。」

「じゃあ、自分でするからいい。」

椅子から立ち上がり、ちいちゃんのベッドサイドに行こうとする、彼の腕をつかむ。

「何でそんな事言うの？まだ生きられる。」

「……その感情は、山下さんの息子の思いとどうちがうの？それとも看護師の君に江端さんの病状説明をして、人間の寿命について、考えてもらわないといけないの？」

そんなひどいこと言わないで！！だって、ちいちゃんは、私が就職したときからずっと入院を繰り返して……。私にとって一番印象深くって、一番大切な人なのに……。自分の心の声を省みて愕然とする。本当に、私は、誰のためにちいちゃんの延命を望んでいるのだろうか。私が寂しいからちいちゃんに生きて欲しいんだろうか……。そんな、私の顔を見て彼は続けた。

「人間の生死は神様が決めるものだ。僕らが操作できるものではない。人生の引き際を決めるのは、本人の意思だ。周りの思惑で振り回すものでもない。」

ゆっくりと彼の言葉を嚙締める。そうだ、その言葉を12年前に誰かに言って欲しかった。

ちいちゃんの方へ歩こうとしている奴を引き止めた。

「私が行きます。」ちいちゃんのベッドサイドへ向かった。

小さく、苦しそうな息をしている。私の泣きそうになってる表情に気づき ちいちゃんは少し笑って言った。

「人間引き際が肝心。あんたの幸せな姿を見るまでは、とおもったけれども、もう限界だ。真一さんというパートナーを譲ったし、そろそろ退散させてもらえるか？」

涙が出る、

「……誰もが行く道だ、泣くことではないよ？……必ず幸せ

になってね。」

答えられず、点滴と、モニターをはずしたあと、家族に一礼をして部屋を出た。

その日の明け方、家族に見守られてちいちゃんは息を引き取った。

お体を拭いて、寝台車の到着を待った。寝台車の職員に連れられていくちいちゃんを病院出口までお見送りするためにエレベーターと一緒に降りる。

寝台車の前にいる男の人が私の顔を見て涙を流しながら、深くお辞儀をしてきた。

「……？ちいちゃんのお孫さん？どこかで見た顔だ……ずっと昔……」

「……シンゾウガイタイ……ヤナオモイデガヨミガエル……」

その男の人は、私が近づくといった。

「お久しぶりです。祖母がお世話になりました、」

そして……と続ける。

「本当に申し訳ございませんでした。」

びっくりして、ちいちゃんの息子さんとお嫁さんを振り返る。

「黙っていて申し訳ございませんでした。」

「……オモイダシタクナイ……デモワスレラレナイ……」

優ちゃんの、お墓でゴメンナサイとずっと謝っていた、アノ子だ。

私はうつむいたまま言葉を搾り出す。声がかすれた。

「……いつ気づかれたんですか？」

「私たちの参列はお断りされたので、告別式に祖母がこっそり、参

列させていただいてました。そのときお顔を覚えていたようです、自分が通っている病院に中野さんが就職されたときには、非常に驚いていました。偶然ってあるんですね。」

・・・・・・キキタクナイ・・・・・・

「自分の侵した罪を考えると、謝って許されることではないと思います。でも、もう一度きちんと謝りたかった。祖母には、あなたに知れたら自分が病院に通えなくなる、あなたを見守れなくなるから、来るなど言われてました。」

青年が土下座した、

「本当に申し訳ございませんでした。」

頭を地面につけている人をぼっと見る。ご両親も頭を下げていた・・・・・

12年もたっているのに、まだ終わってない・・・・・

「お酒・・・好きですか？」

あれから飲んでません、と声がした・・・・・

「許す、とはいえませんが。」

きっぱりとした口調で、目の前の彼を見据えて私は答えた。

「でも、私も同罪なんですよ？」

びっくりとして、顔を上げる彼に焦点が合わない視線を向ける。

「あの時、優希さんはメールを打ってたんですよ。」

私は、私が一番忘れたかった事実を話すために、言葉が続ける。

「けんか別れして、すねてる奥さんのご機嫌を取るために・・・・・だからあなたの車に気づくのが遅れたんです。」

・・・・え？・・・・・と言う声が聞こえる。

「遺品の、携帯電話が打ちかけのメール画面でした。」

忘れられないあのメールの内容。

” 美香まだ怒ってるの？ いい加減機嫌直して？ 愛し”

「だからあなたは悪くないんです。あなたが悪いとすれば、飲酒運転をして、事故を起こした事実だけです」

淡々と続けた。二度としないでください・・・と

「江端さんには、入職してからたくさんのことを教えていただき、とても感謝しております。ご冥福をお祈りしています。」

静かに頭を下げる。彼らはそれ以上何も言わずうなだれていた。

寝台車が校外を出て見えなくなるまで見送った。ゆっくりと振り返り、ドアを開けようとするが力はいらない。ああ・・・、だからごめんね、なんだ・・・、幸せになって欲しいなんだ・・・。その場に座り込んだ、涙が出てきた・・・。

「・・・美香・・・。」

彼の手が私の肩にかかる・・・。

「触らないで！！！」思わず声を上げた。

「触って欲しくない！！！！」ほんとは、あいつが死ねばよかったのよ、優ちゃんにぶつかる前に、木にでも激突すればよかったんだわ。そしたら、優ちゃんは今も美香の横にいてくれたのよ！！ずっとそばにいられたのに！！美香をおいて優ちゃんは死んじゃったのに、何で優ちゃんを殺したあいつがここにいるの！！！」

息を潜めて聞いている気配がした。

「・・・違う、責任転嫁だわ、美香が悪いの。旅行に行こうって言われたのに断らなければよかったのよ。喧嘩なんかしなければ、メーブルを私に打つこともなかったのに、そしたら、車をよけられたの！！！」

・・・ソウダ、ワタシガコロシタンダ・・・

「・・・・・・・・一人にして、あなたじゃないの、あなたじゃ駄目なの。」

「わかった、とつぶやいて離れていく気配がした……。」

病棟に戻った私の顔を見て、日勤の都が苦笑いした。……あんた、患者さんにいちいち感情移入していたら、仕事にならないわよ……と。

わたしは、そうね……と答えた。向かいで、あいつは黙って聞いている。

いまは、ちいちゃんのご冥福を祈ろう。

生理がこない。今までも夜勤のストレスから、遅れることはたびたびあったが3週間も遅れるのは珍しい。……まさか……？ いやな予感が頭をよぎる。

避妊、彼はしてくれなかった。出来たら生めば良いから……と、私の話を聞いてくれなかった。いまさらながらに自分の体の管理を人任せにしていたことを後悔する。

検査薬を買って、確認した。

……ヨウセイダ……ドウシヨウ……

彼にだけは、知られたくない。きっと責任を取ると言うに決まっている。義務感で結婚して欲しくない。それに、優ちゃんとの思い出を否定する人と結婚できない。

どうすればいいんだろう、多分今3ヶ月か4ヶ月目にはいったところか？ 何ヶ月までごまかせるか？ 今やめたいといったらやめられるか？？

答えは見えない、ぐるぐると同じ考えが、頭をまわっていた。

亡霊の後姿と 遺されたもの（後書き）

A D L 日常生活動作、食べる、洋服を着る、移動する・・・など、自分のことがどのくらい一人で出来るかという事です。

” D N A R ” D o N o t A t t e m p t R e s u s c i t a t i o n（蘇生を試みないでください）

リビング・ウィルと同じような意味合いです。

亡霊と現実と（前書き）

暴力シーンあります。

亡霊と現実と

「あんた最近調子悪そうね？」

都が私の顔を覗き込んで、心配そうに言った。

「・・・いろいろあったから。」

私の答えに、そうよね・・・とだまる。それ以上聞いてこない彼女にほっとする。

どうするのか、決めきれないまま時間はたつていった。あの人のことだ、他人から聞いたら、きっと傷つくだろう。そして私の話を冷静に聞かず責任を取ると言い出すだろう、その事態だけは避けたい。一度話さなければ。私の口から伝えなければ。婦人科も早く受診しなければ・・・。気持ちはあせるが何一つとして具体的に進ませられない自分がいた。

・・・ワタシハホントウハドウシタインダロウ・・・

メールアドレスと、プライベートの電話番号は消去していた。

それに、私からだと言ったら出ないかもしれない。確実に会える方法を考えて、マンションの前で、彼の帰りを待った。

最近お腹が鈍く痛む。今日はそれがひどい・・・。どんどん強くなる痛みに気分まで悪くなる。どうなっているんだろう？おかしい・
・周りの景色が暗くなった。

・・・ユウチャン、タスケテ、ミカオナカガイタイ・・・

病棟当直、ER当直、オンコールをこなし忙しさに埋もれていた。
何も考えたくなかった。

ほぼ一月ろくに寝ず仕事をこなし、さすがに疲れたので、今日は帰宅する旨を伝えるために、ER担当の同期の山本のもとを訪れた。

「今日は帰るわ、呼んでもでないぞ。」

「帰らなければ、俺が言おうと思っていた。」よく休めよ・・・とつながる言葉にかぶせるように、ホットラインになる。

山本が受話器を取る、隣の電話のスピーカーをオンにして、救急隊との会話を聞く。

「20〜30代女性。マンションの前でうずくまっているのを住人が発見。目だった外傷は認められませんが、外陰部より出血があります腹部圧痛あり、腹部のぼうまん。頭骨動脈触知弱く、顔面蒼白、ショック状態です。バイタルは脈拍120回／分、血圧触診80・・・・・・5分で到着」

電話を取った山本が、取れそうならルートとって、急性腹症の原因が分からないので、輸液は、とうこつが触れる程度で生食で行って・・・と指示を出すのを聞いていた。住所は俺のマンションだ。

「帰りそびれたな？」

と笑う友人に、仕方ないよ、と返す。若い女性だよね外妊破裂だったらいやだな？と苦笑いしながら軽口を叩く。

行ってる間に、救急車が到着する。同僚が患者の様子を見ようと前に出て救急車の中を覗き込む。救急車から出てきたストレッチャーから真っ白の手が覗く。状態が悪そうだ・・・やばいな・・・

「・・・！！！！日置！！！！」

山本の怒鳴り声が聞こえる、救急車から出てきた患者の顔が見えた。

「っつ！！美香！！！！」

愕然とした、なんで？どうして？応援要請している山本の大声が響

く。

「日置！！見に覚えは！！！！」

「……ある……」

電話の向こうに、急性腹症、腹腔内出血の疑い。外妊破裂の可能性強いギネの医者呼んで！オペ室手配して、血液用意しろ……と怒鳴ってるのが聞こえた。唾然と立ちすくむ俺に罵声が飛ぶ。

「輸液負荷でも血圧上がらない！！お前は医者か、単なる身内か！邪魔するなら出て行け！！」

そうかん準備して！介助よろしくお願いします。ERの看護師に叫ぶと同時に体が動いていた。

オペ室に搬入し、山本に手をつかまれ、OPE見学用の部屋に連れて行かれる。OPEの様子をモニターで見ながら、彼は、ひどいな……と顔をしかめながらつぶやいていた。怖くて見ることが出来ない。

「……避妊してなかったのか？」

「出来たら、結婚できると、手にはいると思ってわざとしなかった。」

「……お前最低だね、とつぶやく声が聞こえる。本当に最低だ。」

「……別れたって聞いたけど……？」

「……俺から別れ話した、元婚約者に嫉妬して……」

本当に最低、救いようがないね……。と言う呟きが聞こえる……。これが原因で美香が死んだらどうしたら良いんだろう。

美香が死ぬ？永遠に失うかもしれない、ありえない……。別れを決めたときと違った感情が心の中を駆け巡った。

「美香がいなくなったらどうしよう……」

俺のつぶやきに、こちらにびっくりした目を向けて、考えろ。と彼は静かに言った。

美香が、死んだら俺のせいだ。自分のわがままで、無理やり美香

を自分のものにして、自分のキャパシティの問題ではなれた。頭を抱えてうずくまる俺に、山本は静かに言った。

「美香ちゃんは、自分のせいで婚約者が死んだと思っっているんだろう？ 誰かが、自分の責任で死んだなんて感情を引きずって生きていくなんて、きついよな。その気持ちをも、無理やりにこっちに向けて、忘れられないものを忘れろと強要して、挙句、してくれないと切っ捨て捨てたのか？ まさか、避妊もしてないとはな？ もし別れた後に出ていたなら、だれが育てたんだ？ 美香ちゃんの性格だと墮ろすなんて考えないだろう。」

たとえ産んだとしても、そんなキャパの狭い男と生活も出来ないだろう。？

・・・親友の、容赦ない言葉を聴きながら、俺は打ちひしがれていた。

「お前の独占欲は、亡霊にまで発揮されてたんだよな？ 美香ちゃんはお前に合に行っただろうな。これからお前はどうするんだ？」

「今度手を出すときは、美香ちゃんのすべてを受け止める覚悟決めるよ・・・？」

自分の、狭量さがいやになる。美香が死んだら俺はゼツタイ自分を許せないだろう。美香もこんな思いを抱えながら、それでも俺のほうを向いていてくれたのか・・・。

いまさらのように、自分に対する美香の愛情を思い知る。

「山本先生」

ERの看護師がそっところらの様子を伺いながら、言った。

「患者さんのご家族のかたがお見えです。どうしましょうか？」

ありがとう、僕が話をするよ。山本は告げると、待合室に向かおうとした。

「……一緒に行っても良いか？」

俺の言葉に彼は、ああ、初療にかかわってくれたしな……とこちらをちらりと見て言った。

待合室隣の面談室には、中年の夫婦らしき人が二組いた。白衣を見て背の高い痩せた男性が近づいてきた。

「父親ですが、娘の様子はどうなんでしょうか？」

山本が、自己紹介の後、到着時の様子、現在の状況、今後の予測されることを簡単に述べた後、詳しくは、婦人科の執刀医からもう一度ある旨伝える。少し背の低い小太りの男性がじっと俺のほうを伺っていた。

「こちらの先生は？」

山本が初療と一緒に担当してくれた医師である旨伝えてくれた。その後、俺は告げた。

「……日置といいます。美香さんと親しくさせていただいてました。申し訳ございませんでした。」

いい終わるか終わらないかの内に、こちらの様子をじっと伺っていた小太りの男性が殴りかかってきた。

「おまえか、美香をこんな目にあわせたのは！！！！美香から全部聞いている。結婚して良いかというに來てたのに、何ですぐ別れるんだよ！！しかもこんなことまで起こしやがって！！最後まで責任が取れないのなら、中途半端に手を出すな！！！！僕たちはすでに息子をなくしているんだ。もうこれ以上、もって行かれないんだ。」泣きながら、のしかかられ殴られるままになっていた。抵抗なんて出来なかった。

ふっと、体が軽くなり目を開けると、男性はもう一人の人に。押

さえられていた。

「初療対応ありがとうございました。」

その男性は、小太りの男性を後ろから羽交い絞めにしつつ、こちらを見ながら言った。

「甥が救急医だったので、救急での初期治療が命の予後を決める大切なものだと聞いていました。感謝しています。ただ、父親としては、美香に今後近づかないでいただきたいとお伝えしたい。こうなったのは、あなただけの責任でないことは分かっています。美香の自己管理が悪かったのでしょうか。ただ、あなたの男としての行動は、親として、同姓として許せない。」

山本に手術が終わるまでどこで待たせていただければ良いですか？とその男性はきいた後山本に頭を下げ、こちらは見もせずに、待合室へと向かっていった。

「相手が、刃物持ってなくてよかったな？」

「・・・・・・いっそその方がよかったよ」

救急外来で、あきれた顔でこちらを見ながら、山本は俺の手当てをしてくれた。

「・・・・・・かなり、腫れるぞこれ・・・・。」

「いいよ、見せしめになるだろう？」

自嘲気味で言う俺に、ため息をつきつつまあ自分の尻は自分で拭かないとな？冷やせよ。といい残し山本は仕事に戻っていった。

美香のことが気になったが、あの場所に戻ってオペを見学するのが怖くて出来ない、自分の中途半端さに自分自身であきれながら、ICUの医師控え室へ向かった。

亡霊と現実と（後書き）

救急隊と医師が直接話が出来るかどうかは、その施設、地域、によって異なります。

MC（メディカルセンター・救急隊の司令部）を通じてやり取りされる事が多いはずです。

・・あくまでも、物語と思って読んでいただけると幸いです。

また、医療関係の表現に関しては突っ込みどころも（かなり）あると思いますが、こちらも、あくまでも物語としてごらんになっていただけると幸いです。

（一応調べてはおりますが・・・。）

登場する医師、看護師の勤務体制も、（物語の一環として）現実とは少し異なります。

此処は看護師は2交替、3交替、の混合・・遅出、早出、がある感じ・・・？

医師は、自分の勉強のためならいろんなところを覗ける環境・・・？

そこまで突っ込む方もいらっしやらないかもしれませんが・・・。

（笑）

あくまでも、私の妄想の範囲と思ってください・・・。

労働基準法は・・・無視・・・（すみません）

明日のためのいま

「日置先生どうされたんですか？」

指導中の山崎医師が声をかけてきた。今年入職したての彼女の指導を現在任されている。まわりの、事情を知っているらしき医師が息を潜めてこちらを伺っているのが分かる。

「急外でかわった患者が、ICUに入る予定だからここで待とう
と思って。」

「先生、私が言っているのはその顔のことです。冷やさないと・・・」

彼女の手を振り切って、奥に設置されているソファ―に座り込んだ。僕の拒否にあいそれ以上彼女も何も言ってこなかった。

時間が過ぎるのが遅すぎる、オペはまだ終わらないのか、という不安とともに、美香の強さを信じたいという思い、彼女が死んだらどうしようという思いがぐるぐると自分の中を駆け巡る。

どのくらい時間がたっただろう。婦人科の同期の医師が僕を探して来た。

「日置、喋れるか？」

人の少ない場所に移動する

「出血量は3000～4000ml、左の卵管破裂、右は異常ない。
ただ、」

「どうも、出血が始まってから、しばらく放置されていたらしく、
全身状態が悪い。レベルも改善が見られないし・・・。困っている。
今のお前に発言権・・・無いよな・・・？」

発言どころか、面会も拒否されるだろう、情けない。

「あとは、神様の領域だ・・・。すまん。大丈夫とはいってやれ
なくて。」

控え室で待つしかないか？戻ろうとした俺に誰かが声をかけた、振り向くと都がいた。

「何で、こんなことに・・・。」

ごめん、と俺がつぶやくと都は答えた。

「あんただけのせいじゃないって、無責任にたきつけた私も悪い。」このまま美香が戻らなかつたら私たちはお互いを一生許せないわね・・・頭を抱えながら都が言うのを聞いていた。

気がつけば、夜も更けていた、医師控え室に詰めている医師の数も減ってみんなそれぞれの場所に散っていく。ソファーにもたれてICU内にいくことも出来ず。帰ることも出来ないで俺はじっとしていた。

「日置先生？」

声をかけられて顔を上げるとICUの師長が見えた。

「家族の方は帰られました。逢っていかれますか？」

病状が不安定な担当患者がICU入室してる時に、話を良くしていたため、それなりに親しい。僕の事情もうわさもしっているようだ。「・・・入ってもいいんですか？」

「先生は、ここのお医者さんでしょう？初療にかかわった患者さんのフォローお願いします。」

美香の寝ているベッドに近づいて彼女を見た。状態が安定しているとはいえ、皮膚色は青白い、寝ている様に見えるが、レベルが戻らないのが心配と担当医が言っていた・・・。

俺はゆっくりとベッドに近づいた、そしてベッドサイドにひざまずき美香の手をそっと握り、その手を自分の頬に近づけて美香の体温を感じた。そしてその手を自分の唇に近づけた。

「・・・ゆうちゃん・・・?」

美香がぼっとした目でこちらを見て微笑んだ。俺は声がでなかった。・黙って美香を見つめていると彼女はうわごとを続けた、葉の影響か、それとも回っていない。

「美香ね、とっても怖い夢を見たの、ゆうやんが死んじゃう夢・・・。おかしいよね? 美香おいてさきに死なないって約束したものね? ちゃんと籍も入れたし、本当のお嫁さんにもしてくれるものね?」

彼女に覆いかぶさり、軽く抱きしめる。

「大変な目にあってるのは美香のほうだよ? 僕は何処にもいかない。ずっとここにいますから安心して、眠りなさい。」

「ゆうちゃん、大好き。何処にも行かないで。ずっと美香を抱きしめていて。いつも怖がってごめん。」

婦長の許可をもらい、その日は朝まで手を握っていた。職権乱用かもしれないがかまうものか。

それから毎晩彼女の様子を伺いに行き彼女の寝顔を見て帰った。

一般病棟に移って、都にひどく怒られた。2週間もICUにいたなんて・・・。ICUでは状態が悪かったので怒るのを我慢していたという都の言葉に平謝りに謝った。おまけに、母と叔母に、今度からは必ず相手の男に使ってもらいなさいと四角い箱を渡されて、ためいきしかでない自分がいた。

「優ちゃんがきてくれたの・・・。」

都が面会に来たときに、何とはなしにいった。

「赤ちゃん産みたかったな・・・」

ほんで、誰と育てるの？どうするつもりだったの？と都が窓の外を見ながら言う。

「うーん、優ちゃんと田舎の病院行こうねって言ってたし、どこか、田舎の診療所でのんびりと・・・」

現実見ろよ？ほんま、優兄ちゃんもちゃんも何であんた置いてったかな？と、都にぶつぶつ言われた。

「うん、だからきつと私が育てられないと思って赤ちゃんつれてつてくれたんだと思う。でもね、その時、美香を抱きしめてくれたものの。温かかったな・・・」

もう、いいわ・・・私・・・。ゆうちゃんは忘れられないって分かったし、こんなつらい思いもうしたくない」

私は一人で生きていくわ・・・。と私の呟きを都は窓の外を見ながら聞いていた。

赤ちゃん、産んであげたかったな・・・。涙が出てきた・・・。

「3交代要員が、一人欠員。」

「・・・？」

突然の都の、発言に怪訝な目を向ける。

都は真っ赤になって、泣きそうな顔をしながら私に言い放った。

「子宮外妊娠の発生率は、全妊娠の1%」

「・・・？」

「万人に起きるときは起きるのよ！！それよりも、私にとってあんたが働けないのが問題！！いつ復帰できるの？1%の偶然の出来事は出来事。それはもう過去の事実よ！！私たちには人員確保という大きな問題が待っているのよ。早く肉体を治して、復帰して！！それがあんたの使命よ！！！！」

都、あんたって相変わらずめちゃくちゃね・・・？感傷にも浸

らせてくれないの……。と笑いながら私が言う。

「そうよ、当たり前じゃん！！鬼の管理職だもん！！私たちは過去を歩んでんじゃないわ！！未来に向かってあるいてんのよ！！そして、私にとって大事なものは、そのことをもって今どうするかだわ」わかった！？・・・彼女は素晴らしい捨てる、仕事に行くわ！！とドアの向こうに消えていった。

「・・・ありがとう。」ドアの向こうに消えた都につぶやいた。

都がドアをでて、詰所に戻ろうとすると、日置が廊下の壁にもたれて座り込んでいた。

「・・・何してんのよ、ヘタレ・・・こんなところで、サボってないでよ？今日のリーダーが明日の検査の指示がまだないって、困っていたわよ。」

「・・・俺のせいだ・・・。」

都は、壁にもたれてうずくまっている、日置の胸倉をつかみ低い声で言った。

「・・・そうよ、あんたのせいだわ・・・。そしてあんたなんか、美香を預けた私のせいでもあるのよ。でもね、もしあんたたちがうまくいっていたとしても今回は1%の確率の出来事だわ、今回のことがなかったって赤ちゃんは生まれてこなかったかもしれない。」

手を離し彼の目を見て都は言った。

「私があなたに希望することは、今度好きな女を抱くときは、結婚してないなら避妊しろって事だけよ。そして、こんなことでうじうじ悩んで終わった過去にこだわるよりも、自分の今すべき事を考えろちゅーんじゃない！！悩むっていうのは、あんたが事実から逃避する

ためにしてるだけじゃないの？」

「ばかたれ！！都是そうはき捨ててさっっていった。」

「……大丈夫か？」

いつの間にか日置の横に立っていた山本が聞いてきた。

「お前の彼女、すごいな……。」頭を抱えながら日置が答えた。

「うん、いつもやり込められている。」苦笑いしながら、山本は日置にかえした。

「でも、あいつの言うことはまっとうだと思うよ。俺たちが生きるのは、今なんだから……。」お前はどうしたいの？」

小さな、掠れた声で日置は山本を見つめながら答えた。

「美香に謝りたい。」

「許されて、終わりにしたいのか？」

美香のネームプレートを見つめながら山本が無表情で聞いた。

「……それでは、単なる自己満足だよな？」

日置は下を向いて再び頭を抱えて山本に答えた。

山本は、ネームプレートから日置に視線を移した。暫くうなだれる日置を見た後、日置の質問には答えず少し笑って、初期治療した患者の様子を見てくると言い残し、病室に入ってしまった。

日置が美香がその後10日ほどしてから退院し自宅療養すると人づてに日置が聞いたのはその10日後だった。

美香が退院するその日病室の前まで行ったが、結局日置は病室には入ることが出来ずにその場を離れた。

明日のためのいま（後書き）

どなたか存じ上げませんが、お気に入り登録ありがとうございます。
文を書くのも初めてなので 本当は投稿しようかと迷ったのですが、お気に入り登録してくださってるのを見て、続けてかく励みになっております。本当にありがとうございます。

2／3 投稿し終わりました。

もし宜しければ、最後まで読んでいただけると嬉しいです。
本当にありがとうございます。

清水澄 拝

明日のための今日 (前書き)

前半、ちょっと重い話です。

明日のための今日

俺が、都と山本に話したいことがあると切り出されたのはそれからしばらくしてだった。人のいないところでとの意向だったので、俺のマンションに二人を呼んだ。都が切り出りだした。

「優兄ちゃんのこと何処まで聞いているの？」

「いところで、婚約者で、医者・・・？事故で亡くなったって・・・。」

「亡くなる時の状況は？」

詳しくは・・・と俺は首を振った。

今更だとは思うけれど、・・・と都は語り始めた

「私と美香は高校で知り合ったの。私が美香と出会ったときは、もう優兄ちゃんと婚約していたわ。」

プロポーズは中学のときって聞いてたわ。ほんとは美香が卒業してから結婚する予定だったんだけど、優兄ちゃんが、教授の娘さんに気に入られたみたいで、縁談を断りきれなくて、美香が16になったときにそれを断るために籍を入れたの。」

「・・・それで、何で何もされてないんだ？」

そりゃ、美香が躊躇してたから・・・。

優兄ちゃんも男だからね。我慢できなかった見たいで、籍を入れた年の夏休みに強引に旅行を計画したらしいの・・・美香は行かないって喧嘩してたわ・・・。卒業まで待つて欲しいって・・・。馬鹿よね、ついてけば良かったんだ。

泣き顔になった都を、山本が抱き寄せた。

後は知ってるとうりよ、一人で旅行に行った日に、信号待ちをしてた、優兄ちゃんに無免許の飲酒運転が突っ込んでいて・・・。

「そしてね、」

都は続けた、「優兄ちゃんは実は3週間生きていたの、多臓器不全で死んでしまうまで。」

救急の受け入れ病院が見つからなくて、初療が遅れて、脳死に近い状態だったらしいわ。

優兄ちゃんはドナーカードを持っていたの、だから、脳死判定をどうするかって話になって……。

でも美香がそれを受け入れられなくて、脳死判定は拒否して延命処置を希望して、あとはおきまりのコースよ……。

……多臓器不全を起こしたけれど、ありとあらゆる手を使って延命していたわ。結果はわかるわよね。

そして、美香は 3週間それをずっと見ていたの。

……手も足もすべてがパンパンに膨らんで、亡くなる時には、面影はなかったわ。それを、16歳のみかは全部見てて、それが全部、生きていて欲しいと願った自分のわがままのせいだと思ってるのよ。

「それだけ……じゃないの」
都は続ける。

「お葬式が終わった後に警察が遺品を返してくれたの。」

「中に携帯があって、打ちかけのメールがあって、若い刑事が、そのメールを打っていたから自動車が突っ込んで来るのにきづかなかったんだらうって、美香に言ったのよ。」

「メールの文は、美香への謝罪だったわ。」

「それから、美香は変になったの。そのころの彼女の記憶はないと思うわ。」

正気になった彼女が、看護師になると聞いて、びっくりしたわ。

淡々と都は語っているが、その、死に際がどうだったかということ、容易に想像がつく。

「12年たっても終わらないのよ、美香はすべてが自分のせいだと思ってる」

「私は彼女に前を向いて欲しい。でも、私じゃ無理なの。」

「彼の存在を否定する僕でも難しいね・・・。」

都は、僕をまっすぐ見つめて言った。

「そうよ、あの子の存在は、優兄ちゃんごとよ!!」

後は自分で決めてと都に言われた。

同じ過ちは繰り返せないから、少し考えたい。・・・と、俺は返した。

俺の覚悟の問題だ。

暫く休職し。体調の戻った私は元の職場に戻った。

3月がきて新しい年度になろうとしていた。

病棟師長が定年になった。

今日はそのための送別会だ。師長さんの関係者の集まる盛大なものになっている。あまり参加したくなかったが、都に気分転換!!と誘われて断れなかった。

・・・会場に、彼はいない・・・ほっとした反面、残念に思っている自分に、いやになる。

乾杯と、師長さんの挨拶が済んで時間もたって、ほろ酔い加減で

いい気分になっていた。

最初の席とは少しずつ移動していたが、突然開いていた私の横に、ICUの看護師が座った。

「日置先生と別れたんだってね？」

・・・唐突な、発言に息を呑んだ。顔を見て思い出す、そうだ、しんをすきだってうわさを聞いたことがある。

「プライベートなことなので。」

私は言葉少なく答えた。都が私の様子に気づき、横に座った彼女を睨んだ。

でも、彼女はまったくひるむことなくつづけた。

「周りをおんなに巻き込んで、ドンだけみなに迷惑かけたと思ってんのよ？」

子供が流れてよかったわね、なかったことに出来たみたいだし？」身をすくめながら、黙って聞いていた。都が暴言に切れたようで「あんな・・・」と低い声を出した。

お世話のなった師長さんの送別会に参加するために会場に向かった。仕事が終わらず遅れての参加となった。そっと会場に入りふと見ると、以前俺に付き合ってた欲しいと言ってきた子が美香に絡んでいるのに気がついた。そっと近づいて話の内容を聞いて俺は、まだ暴言を吐き続ける彼女の後ろにそっと立った。周りが俺に気づき息を潜めていたが当の本人は気づいていない。

そっと耳元に近づいてささやいた。

「それ以上はいわないほうが君のためだよ？」

振り返り、息を呑んで俺を見ている彼女に言葉が続けた。

「君は、勘違いしているみたいだから訂正しておくけれども？美香を俺が振ったのではない、俺が彼女に振られたんだ。無理やりに関係を持って、避妊して欲しいという美香の申し出を断ったのは俺。だって、子供が出来れば彼女を俺のものに出来ると思ったからね・・・」

？」

でもね、・・・と俺は続けた。

「子供が出来ても、俺は打ち明けられてないし、むしろ別れを切り出された。恥ずかしい話俺もそこまで嫌われてるとは思わなかった。俺が恥ずかしいからこの話は終わりにししてもいいかな？」

にっこり微笑みながら、一生懸命言い訳をしようとしている彼女の顔を見ながら続けた。

「それと、恥ずかしい話だが俺は、まだ彼女に未練がある。美香を傷つける人がいたら許さないから覚えておいてくれるかな？」

黙ってうつむいている彼女の横に座っている美香を見た。

「・・・でよう、付き合って・・・？」手をひばって有無を言わずに、店を後にした。

繁華街を抜けて会話のないまま駅に向かって並んで歩いた。お茶でも飲むか？という俺の問いに美香が、公園の自動販売機を指差した。お茶を買い、ベンチに並んで座った。

「久しぶりだね、」

俺の言葉に、ごめん・・・と美香がつなげる。

「・・・？何か謝られることしたっけ？」

「だって、あれじゃあ全部あなたが悪いみたいじゃないの？」

俺はお茶の缶を銜えながら、事実だから・・・といった。

「でも、妊娠にきずかず、放っていたのは私の責任よ。もっと早い時点でできずいたらこんな大騒ぎにはならなかったわ。」

「でも、君の意向を無視して避妊しなかったのは俺の責任だ。この次のときは気をつけるよ。」

にっこり笑って彼女に手を伸ばす僕の手をよけながら、美香が複雑な顔をして続ける。

「この次の人には、そうしてあげて・・・？」宙にういたまま行き場

のなくなった俺の右手をよけながら美香は立ち上がり、そう続けた。俺は、言葉が続けようと美香を見上げた、美香は俺の目を見て言った。

「私の心は私のものなの。優ちゃんは私のそばに生まれた時からずっといてくれた。その想いは何があってもなくならないの。」

・・・だからごめん・・・。お茶ご馳走様。そういい残して去っていく彼女を俺は黙って見送るしか出来なかった。

ほんとうにほしいものは・・・？

翌日仕事に行くと都が寄ってきた。

「昨日はありがとう、美香を助けてくれて。」

自分が招いた結果だからね。というと、まあそれはそうだけれども、少しは見直したし・・・と続けられた。

「あの後どうしたの？」と都に聞かれた。

「公園で、缶ジュース飲んで別れた。」とカルテを見ながら答えた。なにそれ？あんたたち高校生？というみやこの言葉に、でも俺たちらしいだろう？それに・・・もう終わったんだよ・・・とつなげた俺の言葉に、都はごめん余計なことを聞いたとつぶやいた。

季節が変わった、また夏が来る。一番嫌いな季節だ。優ちゃんががいなくなった季節だ・・・。

優ちゃんのお墓に今年もひとりでいった。毎年命日には一人でくることがしている。

「花が添えてある・・・？」

早朝に叔父さん達と父が来ている筈だがそれ以外にも誰か来てくれた様だ。おじたちは私が持つて来ることを知っているので花は持参しない。それも、かすみそうにガーベラ、あまりお墓には会わない花が包装紙に包まれている。

「優ちゃんの友達・・・？」

それも、4年目ぐらいまではあったが、最近はなかったのに・・・不思議に思いながら、優ちゃんにお願い事を伝えた。

「・・・あのね、知っていると思うけれど、赤ちゃんの位牌を作っ

たの、家に置いとくと母たちが悲しむからここに持ってきたの。一緒に入れて欲しいんだけど、いいかな？」

何処からか風が吹いて、いいよ、っていつてるように聞こえた。お墓の前をずらして、位牌を中に入れた。

「いつになるか分からないけれど、美香もここに来るからね。」しばらく、木のおい感じ、葉音を聞き、景色を楽しんでそこを離れた。

実家に帰る前に、中野の家を覗いた。

「ただいま。」

玄関を開けて声をかけると、恐る恐るといった感じで、叔母が出てきた。

「ああ、・・・美香ちゃん誰かに会わなかった？」

「・・・？ううん？・・・そうそう、優ちゃんのお墓にお花が添えてあったからお部屋に飾ってあげようと思って・・・。」

と言葉を続けようとする叔父がすごい剣幕でできてきて怒鳴った。

「そんなもん！！捨ててしまえ！！！！」

叔父の剣幕に私がひるむ。叔母は「お父さん！！」と叔父を睨んだ。そして続けた。

「ごめんね、美香ちゃん会いたくない人と会ったものだから。」

誰だろう？こんな叔父さん見たことがない。びっくりしている私を見て、叔父はわれに返ったように、すまない・・・といい「今年も泊まってくれるよね。」と優しく言ってくれた。

もちろんそのつもりで来た。私は、戸籍上はこの嫁だ。「晩御飯は、優の好物と美香ちゃんの好物を作ったのよ。」おばがにっこり笑って続けた。では、和洋折衷の手巻きすしか、懐かしいメニューに一人微笑みながら、2階に向かおうとした、

「その花は、もって行かないで。」

お婆の言葉にびっくりして立ち止まる。

「お墓のものは、家には持ち込まないものよ・・・？」

そういえば、お供え物はいつも置いてきていた。

「ゴメンナサイ、考えなしだったわ。」

叔母は黙って私から花を受け取ると、叔父に渡していた。叔父は黙って玄関から出て行った。

「美香ちゃん、夕飯は7時でいい？」

2階に上ろうとしている私の背後から声がかかる。

「お願いします。」

振り向いて、私はお願ひした。

ひさしぶりにはいる優ちゃんの部屋は、優ちゃんが使っていたときのままだ。

このベッドでうたたねしている優ちゃんが起きるのを良く隣に座って待っていた。もっとも彼が目ざめてここに押し倒されたのも1度や2度ではない。

「13年目・・・か？」

前に進もうと思った、前に進めるかと思った、でも、この部屋にあふれる思い出をすべて忘れて前に進みたいとは思わない。

ベッドに横になり、優ちゃんの思い出を抱きしめる。

「美香はどうしたいの？」

優ちゃんが私に話しかけていた、顔は見えないけれど、いつものように後ろから抱きしめてくれている。

「真一君が好きじゃないの？」

何でそんなこというんだろう？ 優ちゃんが一番なのに。

「僕はもうこの世に存在しないんだよ？ ねえ、みか？ 君がそんなん

じゃ僕はおちおち死んでられないよ?」

「いいもん!! みかは、幽霊でも優ちゃんがいいの。」・・・あれ? 今の私って、小学生の身体に見える・・・?

優ちゃんは、私の頭をなでながら言った。

「僕は、美香が小さいときに恋に落ちて、君の幸せだけを祈っていたんだ。僕の存在が君の幸せを脅かすのなら、僕はもう僕の存在を君の中から消してしまいたい。」

やめてそんなこと言うのは!!!

「ゼツタイヤダ、美香は優ちゃんがいいの!!!!」

「でも僕はそれを望んでないよ。」ゆつくりと、優ちゃんが背を向けた、追いかけようとするのに足が動かない。

「やだ!!!!!!」

自分の声で目が覚めた。体がびっしょりぬれている。叔父がびっくりして飛び込んできた。

「美香!!!! どうした!!!」

「夢を見たの・・・」なきながら説明をした。

「優ちゃんが、意地悪言うの」叔父の胸に顔をうずめた。

「自分の思い出が、美香の幸せの邪魔をするなら、自分は消えるって・・・」

そしたら美香は、一人になっちゃうのに・・・・泣きながら続けた。

美香は一人じゃないよ、僕たちがいるよ。叔父は素晴らしいがずっと髪をなでていてくれた。

その大きな手はとても暖かった・・・。

デモワタシノホシイノハコノアタタカサジャ

アナ
イ

明日はどっち?・・・その1

肌寒い季節になった。

都と久しぶりに親交を深めるべく、私たちは居酒屋にいた。

「・・・んんん」

私を見つめながら都が何か言いたげにしていた。

「なに? 愛の告白? 山本先生に言うわよ?」

そうじゃなくて・・・と言いつつ出した。

「日置先生の最近いうわさを聞かない・・・」

「・・・どうということ?」

んんんといいくそうに続ける

「変な団体とつながりあるんじゃないかって・・・」

なんで? と聞くと都はポツリポツリと言いつつ出した

「金曜夜から土日の奴の行動がつかめない、土日の病棟、ER当直にも入らず、かといって院外当直も断って、緊急時に連絡つくけれど、コールバックだし電話対応だし・・・病棟看護師からも不満の声がでてるし・・・。最も此処最近担当も減らされてるみたいだけれど・・・。おまけにあのあざ」

あざ・・・? ああそういえば最近月曜はいつも顔にあざを作ってる・・・週末治ったかと思ったら、また月曜に増えている。

「それに、月曜はいつも二日酔いだし・・・」

「危ない団体?」

「わからん・・・。美香あんたなんか知らない?」

知るわけないでしょう!! と私が声を上げる。

そりゃそうよね、と都が返す。

都に言われて奴の動向を見ていた。

あざは減っているみたいだが相変わらず週末の動向はつかめず、確かに病棟では土日彼を見かけない。ER当直もしてる雰囲気もなく・・・

動向を知っていそうな彼の友人にそれとなく聞くが、私の顔を見ると皆口を噤むかごまかして逃げる・・・

・・・そらそうだろう・・・別れた恋人に何を語れるのか？私の立場でも聞かれるのはいやだ。でも個人的には心配だった。

もう3ヶ月になる。仕事に支障は出てないんだろうか・・・？いや出ているはずだ、でなければ、都が私に彼のことを聞くはずはない。

肌寒い季節だというのに、公園で酔って寝ているところを職務質問されたりもしているらしいと言っていた。

山本先生も困っているようだ。

でも・・・とふと思った・・・普通に平日夜遅くまで働いて、休みのはずの土日到现在がつかめないと言句を言われる・・・。医師ってなんて因果な商売なんでしょうね・・・。

でももう、私が心配してあげる理由もないだろう・・・。

世は、ジングルベルの響く季節に突入しようとしていた。

明日はどっち?・・・その2

夜勤で認知のお年寄りの相手をしていた。

ふと、人の気配を感じ入り口を見る。

「よ!! 差し入れ。」

珍しい、土曜日の夜だというのに、日置先生が詰所にきた。

「珍しいじゃない、何しているの?」

「・・・仕事してたら悪いか・・・?」

無然とした表情で答えた彼の顔を見ていたら笑えてきた。

「だって、最近あなた、なんていわれてるか知ってる?」

「週末毎飲み歩いてるろくでもない奴・・・?」

あたり・・・と笑うと、ドーナツもって帰ろうかな? という。いえ

いえ、差し入れはいただきますよ。と箱を受け取った。

休憩室に箱を置きにはいると後から彼が追いかけてきた。

「何か食べに行かないか? 定時に終わる?」

一瞬、返事に困った。

「友人として誘ってるんだけど、そして、心配かけてる週末の事情も聞いて欲しくて。」

「・・・聞いて回ってくれてたんだろう?・・・とこちらを向いてにっこり笑う彼に、どきまぎして挙動不審になる。」

「・・・どんな風に思われたんだろう・・・。」

暫く思いあぐねたが、週末の動向と聞いて心配だったので意を決した。

「1時過ぎには終わると思う。何処に行ったらいい?」

正面玄関で待ってる・・・と言って彼は出て行った。

仕事を終えて、待ち合わせ場所に向かった。見慣れた軽自動車が止まっている。

助手席側に回って、ドアに手をかけようとしたら中から開けてくれた。

「こなかったらどうしようと思ったよ」

「・・・約束したんだから、そんなことはしません。」本当は、すっぱかそうかと悩んだことは黙ってしよう。

何処に行くの？と言う私の問いに。玄さん・・・と、近所のラーメン屋の名前を言った。

よかったほんとにラーメン屋だ。

こちらを見て、にやっと笑って彼は言った。

「ほっとした？」

私はむっとして、黙って前を見た。

そこは、車で15分のところにある、10人もしればいっぱいになる小さな店だ。

カウンター席しかなく、端っこに2人で並んで座って注文を伝えた。

店主の勢いのいい掛け声を聞きながら、私は聞いてみた。

「あざ、最近はなくなったのね？」

水を飲みながら、殴られなくなったからね・・・と彼が笑う。・・・？殴られる？誰にだ？

ああそうそう、これ渡しと思うって。とポケットから彼は無造作に箱を取り出した。紙で出来た小さな箱だった。

「なにこれ？」

無造作に渡されて、無造作にふたを開けた。

「・・・・・・・・！！！」声がでなかった。これって！！

「そうそう、去年の今頃、プレゼントしようとして断られた奴。」しれっと2杯目の水を飲みながら言う。・・・こんな、ただの箱に入れられるような値段じゃなかったぞ？

「残念ながら、返品不可の状態なんだ。」

あっけにとられてる私の左手をつかんで彼はそれをはめた。

「・・・・ちよつとまって!!!!!!」

にっこり笑って彼は言った。

「待つよ何年でも、僕が君の中野さんの思い出ごと君を愛して行こうって思っているのがわかってもらえるまで。・・・・、いまさただけでもね。」

おじさんが、ラーメンを持ってきた。

「冷めるとまずいし食べようか？」平然とラーメンをすする彼に私はあいた口がふさがらなかった。

その後、紳士的に彼はあたしのアパートまで送ってくれた。そして、健全な中学生のように手を振って私を見送ってくれた。

結局、彼の週末の動向は聞きそびれた・・・・。

「・・・・そうきたか・・・・。」

事の顛末を都に話す。彼女は笑い、あきれながら聞いてくれた。

「ラーメン屋でプロポーズね・・・・やるな!!」

「都!!そこ突っ込まなくていいし」

私が怒ると、都はまじめな顔をして言った。

「だって、あんた。奴と二人でちゃんとしたところ誘われたら行くか？」

それは絶対無い。ラーメン屋で、しかも週末の動向の相談と言われたからいったんだ。

じゃあ奴のたくらみにまんまと乗ったんじゃない。と笑う都を睨みながら。

「そうじゃなくて、私が相談したいのは・・・」

喋る私の口を人差し指で押さえて彼女は言った。

「いつまで人に甘えてるの? いい加減自分で考えなさい。」

以上終わり、と都はそっぽを向いた。

デモね、そっぽを向きながら続けた。本当に、優にチャンの思い出

ごと愛してくれるなら、あんないい奴いないよね・・・？

それから、私は日置先生に度々食事に誘われた、断りきれず何度か行った。

彼はとても紳士的で、楽しく食事して、会話してそれ以上のことはなく、いつも手を振って私のマンションの前で別れた。
そんなこんなで、3ヶ月が過ぎた、ある日・・・。

「時間あつたら寄って行かないか？」

夕食と一緒に食べて帰宅途中に彼は言った。どうしようと答えあぐねていると、無理はしないで・・・と小さな声で続けられた。

「紅茶・・・ご馳走になろうかな・・・？」

この先の覚悟はまだない、でも離れがたい・・・。

そんな気持ちがぐるぐると私の頭の中を駆け巡り、私の口からでたのはこの台詞だった。

明日はどっち?・・・その2(後書き)

亡霊の後姿

久しぶりにはいる彼のマンションは、あのころのまま変わりがなかった。

お気に入りクッションも定位置にあった。

「好きなところに座って?」・・・と彼に言われる前にクッションを独り占めにする。

それを見て笑いながら彼はキッチンへと消えていった。

しばらくして、スパイスの香りのするチャイが出てきた。

「・・・うーん相変わらず美味しい!専門店の味ね。」

それから、二人で夜遅くまでずっと喋っていた。彼は向かいでずっと私の話を聞いてくれた。

美香が楽しそうに喋るのをずっと聞いていた。そのうち、仕事の疲れからいつの間にか、うとうとしていた。目が覚めたら横で美香が寝ていた。眠ってしまった美香の寝顔をしばらく見ていた。しばらくは我慢していたが、後ろから抱きしめる形で美香を腕の中にいれてみた。

夢心地のなか、美香は抵抗せず、俺は調子に乗って。抱きしめる手を強め美香の柔らかさを堪能した。

どのくらい時間がたったのだろうか?いつの間にか僕もうとうとしていた。

ふと気づくと、美香がぼんやりとした目で僕を見ているのが見えた。俺も寝ぼけていたのと、美香を腕の中に抱いている気安さからか、ついそのままの体制でライバルの話を聞いてみた。

「中野先生ってすごい人だったみたいだな?」

「・・・」美香は半分寝ながら聞いていた。

「頭が切れるし、人当たりはいいし、判断は速いし、冷静沈着で、あだ名が”王子”だってな？」

「・・・それ誰のこと？」

ものすごく怪訝な顔をして、美香が俺の顔を見る、少し目が覚めたようだ・・・でも僕の腕の中から逃げようとはしない、僕は気づかれないようにそっと抱きしめなおす。

「・・・？え？お前の、婚約者・・・？」

「私が知ってる優ちゃんは、俺様で、暴君で、人当たりは一見いいけれど、めちゃくちゃ人の顔色見て対応するのがうまいからそう見えるだけで、お腹の中は真っ黒で裏表ものすごいし、すき見れば触ってくるエロエロ魔人で・・・。」

「・・・？それ誰のこと？」

僕は思わず怪訝な顔になる。

すると美香が、こちらに向き直って、真っ赤になって答えた。

「だから優ちゃん！！！！だってキスは挨拶がわりだし、油断するとすぐ服を脱がそうとするし、服のすそから手を入れるなんて日常茶飯事だし。」

美香の剣幕に、おもわず引き気味になりながら・・・でも、たずねてみた。

「・・・ものすごく、ストイックで、紳士だったって。」

「それ誰情報？」

「ICUの師長。」

ああ、と美香がしたり顔で言った。

「だって、優ちゃんどう見たってここでは猫かぶってたもの？この学園祭に来たときに、別人みたいに振舞うから、美香ぞっとしたものだ。」

容赦無く彼女は続けた。

「家の中では傍若無人に振舞うくせに、ここの看護師さんには笑顔を振りまいてるし、優しい口調だし。優ちゃんって、興味ない人に

は本心ゼツタイ出さないから、ただのやさしい、良い人に見えるのよね。」

お前、それ恋人の話題だよな？嫌いだった奴の思い出じゃないよな？俺の心の声をまったく無視して、エキサイトしている美香は言葉が続ける。

「だってね、優ちゃんが高校生のときに毎月手紙くれる人がいたんだけれども。」

黙って聞くことしか出来ない。

「優ちゃん読みもしないで、ゴミ箱入れるんだよ！あんまりだと思って、美香が宛名見たら毎月見る名前で、優ちゃんにそういったら、名前なんて見たことが無いしわからないし、興味ないってばっさり。」

「……。」

「あんまり腹立ったし、しばらく口利かなかったらお断りの手紙やっ」と書いてくれて。それでも手紙が減らないからって、その年の文化祭によばれて行ったら公衆の面前で、美香にキスして、”僕のすきなのはこいつだけだ”って宣言するんだものむちゃくちゃよ」

「お前そんな時いくつよ？」

「6歳、優ちゃんは高3」

「……。」

「それで、ロリコンってうわさが立って手紙が来なくなったの。そんなことに美香を使うなんて、あんまりじゃない！！！」
それは本当に、お前を利用したんだろうか？

「だって、みかそのころキスって、家族みんなとしてたし。たいしたことじゃないって思ってたんだもの。」

「……。」

「それに、口癖は美香のバージンは僕のものだ。だったし……？」
「なんだそりゃ。」

「中学2年のときにプロポーズされてそれからずっとそれが口癖。」

部屋に遊びに行ったら何度襲われたか。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・なんか、俺の聞いてた中野先生像がどんどん崩れていく・・・・・・・・・・。」

「お化け屋敷は嫌いだし。」

「それは俺もだ。」

「ホラー映画は怖がるし。」

「俺も怖い。」

「ゴキブリは平気だけれども、蜘蛛は駄目。」

「・・・・・・・・・・。」

「こんなにゃくと、しいたけが嫌いで、でも私が作ったものは残さずに食べてくれた。」

猫が好きで、犬は苦手。人の好き嫌いがはっきりしてて、嫌いな人には見向きもしない。

おまけに、人を見て対応するからとってもいい人に思われるけれど、実は裏表はあるし、腹黒いし・・・・。

・・・・・・・・でも、私は、甘やかしてくれた・・・・。

・・・・・・・・すっごく、好きだった

な・・

「でもね、優ちゃんにひどいことしたの。」

俺の胸に頭をもたれさせてる美香のかみをゆっくりとなでた・・・・。

「事故の後先生が、救命は無理、覚悟してくださいって言う言葉が信じられなかった。だって、昨日までわたしに意地悪ばかり言ってたんだよ？急に居なくなるって言われても信じられなかった・・・・。優ちゃんは、しんどかったろうに、私のわがままで無理やりそのしんどい時間を引き延ばしたの。」

俺の服をつかむ手に力がある。

「私は、ただ、優ちゃんに生きていて欲しかったただけなのに、あんな姿になるなんて知らなかった！！今だったら、あんな馬鹿なことは頼まないのに！！！！」

「それで、今度は延命希望しなかったことを悔やむのか・・・？」

美香が俺の手の中で身を固めた・・・。

「その時は、それが最善の方法だと思って頼んだんだろう？」

でも、あんなに膨らんで面影もなくなって・・・。美香は下を向いたままかすれた声で言った。

「でも、中野先生は、そんな姿になっても、お前の傍に居たかったんだよ。」

俺の言葉に、美香が息を潜めたのが判った、言葉が続けた。

「お前も感じたことないか？この人はどうして生きているんだろうか？何で生きられるんだろうか？不思議な人たちに臨床現場で遭遇しないか？」

「あれは、医療の賜物か？違うだろう？医学の及ばない部分での不思議な力だと思わないか？」

「神様がかかわっているのか、人間の計り知れない力なのかかわからないけれど、中野先生は、お前と少しでも長く居たかったんだとおもうよ？そしてお前のつらそうな姿を見て、引き際だと思ったのが、あのときだったんじゃないのかな？」

「・・・自分の体がどうなっても、お前の傍に居たかったんだよ・・・。」

「優ちゃんも私と同じ気持ちだったの？」

「でなけりゃ、脳死で3週間も引っ張れるか？」

美香はじつと俺の顔を見た。そして俺の胸に顔をうずめると泣きながら、大好きだったの、ずっと傍に居て欲しかったの、ほんとに大好きだったの……。同じことを繰り返しながら泣いていた……。俺はずっと、髪をなでながら、知ってるよ、悔しかったね……。と繰り返していた。

そのまま、二人で寝てしまった。

夜中に目が覚めてベッドに美香を運びその隣で少しだけねた。

亡霊の後姿（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

もうすぐ、終了の予定です。初めての投稿なのでときどきものでしたが。どうやら終わりも見えて来て、無事に終える事が出来そうでございます。

此処までこれたのは一重にこの拙い物語を読んでくださっている皆様のおかげです。

毎日、P V、ユニーク、お気に入り登録件数を見ながらそれを励みとさせていただいております。本当にありがとうございます。

もし宜しければ、終了までご覧になっていただけるととても嬉しいです。

清水澄 拝

あしたへの・・・

夢を見た、優ちゃんが横断歩道を歩いている・・・携帯を操作しながら・・・。

「・・・まだ怒ってるかな？ご機嫌とつてもいいけれど、ほっといて出方を見るのもありだよな？何のために、教授のわがままを利用させてもらって籍を入れたのかわかりやしない・・・。せっかく籍を入れたのに、なんで、させないんだ本当に・・・。」

・・・相変わらず、鬼畜で俺様な心の声が聞こえる・・・。

立ち止まり、周りを見回している優ちゃんが居た。

「・・・？？美香の視線を感じる？。」周りを見回しながら不思議そうな顔をした。

その内携帯をポケットの中に入れようとして、手を入れるが何か探し始めた・・・？

「しまった、かぎ落とした・・・。母さんに怒られる・・・。携帯出したときかな？」

横断歩道に戻って行った。

・・・ここ、事故のあったところだ・・・。

信号機の横で、鍵を探している優ちゃんが居た。優ちゃん逃げ
て・・・！！

・・・
周りが真っ暗になって、急ブレーキの音がした・・・。

目が覚めた、私の携帯電話が鳴っていた。携帯にでるとあいつの声でした。

「・・・め覚めたか？ 腹が減ったら冷蔵庫の中のもの適当に食べて良いよ。」

ボーっとしながらあいつの声を聞いた。ここは何処だろう？ ベッドに寝ている・・・？

何で？ 何か夢も見たように思う。

・・・・・・・・・・ドンナユメ・・・？

黙っている私に、伺うように電話の向こうの声が続いた。

「・・・何もしてないぞ？ 隣で寝ただけだ。」

「・・・・・・・・今何時？」

「9時過ぎ、俺は今仕事してる」

「どうやってでたらいいの？ 鍵はどうしたらいい？」

電話の向こうで、息を呑む声が聞こえた。

「・・・・・・・・帰るのか・・・・・・・・」

黙って、携帯を持ったまま冷蔵庫に向かう、あけると、チーズ食パン、牛乳、しか入ってなかった。ため息をつきながら答える。

「何時に帰ってくるの？ お昼どうするの？」

即座に、返事があった。

「帰ってから食べる。1時には帰れると思う。」

「じゃあ、買い物行って材料買ってくるわ。・・・鍵は何処？」

電話の向こうで安堵したような声が聞こえる。

「鍵は、寝室のローターの引き出しに入ってる。」

携帯を持ったまま、ローテーブルをあけた。私のキーホルダーのつ

いた鍵が入っていた。

「・・・・・・？見つかった？」電話の向こうで彼の声が聞こえる。

「・・あった。」キーホルダーのことには触れず、短く答える。
何かあったら、何時でも電話して？といって彼は電話を切った。

彼が、帰ってきたのは13時前だった。

「お帰り」

私の顔を見て、ほっとため息をついてる彼が居た。

「帰ったと思った・・・・？」意地悪く笑いながら告げる。

「うん、居なかったらどうしようと思った・・・・。」

気弱な彼の返事に少し戸惑いながら、食事の用意をした。

「マンションから10分のところにスーパーがあると便利ね。」

おまえ、運転しないからそういう立地のところを探したんだ・・。
とかれが答えた。

「・・・・・・何時に出たの？仕事終わったの？」

なべの中を覗きながら、5時にでて、気になる患者診て、休日中の指示だししてきた。

明日は休めると思う・・・・と言った。・・・・土曜の朝5時に指示出されたら夜勤の看護師ものすごいやだっただろうな・・・・。

黙って聴いてる私の心の声がわかったのか、

「だって、昼間の時間を空けようと思ったら、仕方ないじゃないか・・・・」
「・・・・」
と言いついてる彼が居た。・・・・そうよね、労働条件が悪いのよね。

昼食を食べて、帰り支度を始めた私に彼がいいにくそうに言う。

「明後日まで時間を空けたんだけれども？」

振り返って、怪訝な顔で彼の顔を見た。そしてその表情のまま「どうしろと？」私は聞いた。

彼は、息を詰めて言葉を捜しているようだった。その時、彼の携帯が鳴った。

「はい、はい、いえ・・・休みですが・・・その話はまだ出来ていなくて・・・いえ、そんなつもりではなく、その気になるのを待っているだけで・・・。」

話をしながら部屋の外にでようとしている彼を捕まえた。

電話の向こうでまくし立てている人の声が、聞いたことのある声に聞こえる・・・？

叔父さん？青くなって抵抗する彼から電話を取り上げ耳に当てた。

電話の相手が変わったのにも気がつかず、電話の相手はまくし立てた。

「真一君いつまで待たせるんだ？週末には飲みに来る約束だろう？美香とはいっ婚約するんだ？じれったいなあ！優なんか、こっちはらはらするぐらい素早かったぞ？」

・・・何の話だ？氷点下の冷氣を出しながら、電話の向こうの人に告げる。

「・・・叔父さんお久しぶりです。何の話ですか？」

電話の向こうの声は、ひるむことなく続けた。

「あ！！美香か？なんだ！！大丈夫じゃないか？もう真一君が待ってくればかりだから、やきもきしてたんだ。いつ式を挙げるんだ？・・・何を言ってるんだろうこの人は？彼を見ると頭を抱えて、ため息をついている。」

「・・・叔父さん？私にはまったく話が見えないんですが？」

電話の向こうで、叔父が喋り続けていたが、彼は私から電話を取り返すと、「後で、折り返しかけますから。」といって電話を切った。

気まずい沈黙の後、いいにくそうに彼が口火を切った。

「・・・週末の動向を知りたいっていったよな？覚えてるか？」
黙ってうなずきながら、彼を上目ずかいに睨みつける。彼は私の視線を避けるように何もないうところに、視線を漂わせながら話しはじめた。

「中野と橘の両親のところに行って、お前に求婚する許可をもらってたんだ。」

顔を上げて、口をあけて哑然としてる私をちらりと見て、女の子なんだから・・・とぶつぶつ言う奴を思わずもう一度睨みつける。彼は再びびくびくしながら視線をそらし、話を続けた。

「最初は門前払いどころか、顔を見たら殴られてた。通い詰めてる間にだんだん懐柔できたんだけど・・・そのうち、飲まされる様になって・・・ね、大変だった。」

それで、酔っ払って公園に寝てたのね・・・呆れた・・・。

「許可がもらえたから指輪を渡したんだ。改めてはじめようと思つて。でも、あの二組すごいなの。」

苦笑しながら続ける・・・

「許可もらったとたん、いつだ？どうなった？ってほぼ、毎日誰かがにはっぱかけられてるよ。」

・・・穴があったら入りたい・・・

「お前の気持ちしだいだから・・・て言ったら、悠長なこと言わずに実力行使しろ！！だってよ？」

・・・ほんと、何年たっても変わってない・・・

じっと、私の顔を覗き目を見つめながら彼は続けた。

「まだ駄目か？いつまでも俺は待つつもりだけれども・・・、もう望みはないのか・・・？」

そして苦笑いしながら続けた、実力行使は、もう懲りたからやめておく。・・・と
しばらく黙った後、お茶入れようかと、キッチンへ向かおうとする彼の腕をつかんだ。

「優ちゃんの記憶はなくならないわ。」
「・・・知ってる。」

「優ちゃんの記憶ごとで本当に我慢できるの？」

何も言わずに抱きしめられた。

どのくらい時間が経っただろう、どのくらいの時間彼の温かさを感じたんだろう。

ゆっくと彼が告げた。

「俺は嫉妬深い。」
知ってるよ・・・？。

「思い出までにやきもちを焼いてしまう。お前を愛すれば愛するほど独り占めしたい。」

そうなんだ・・・。

「この性格は直らないと思う。同じ間違いを繰り返す。」

返さない自信はない。」

断言するんだ・・・？

「でもな、その嫉妬も、お前を失うことを思えばたいしたことではなかったんだ。」

「俺にとって何より怖いのは、お前を失うことだよ。」

私のほうを向いて彼はここにいない誰かにも言い聞かせるように言った。

「お前が好きだ。ずっとそばにいて欲しい。」

駄目か？とささやく彼に、私は今の気持ちを言った。

「はじめてあったときからひかれてたんだと思う。でも私は優ちゃんへの罪悪感から、一人で居なきゃいけないと思ってた。だからあなたへの気持ちも自分で認めたくなかったし、その資格はないとおもっていたの、これから優ちゃんの想いではなくならないしそのことで、あなたとの生活の中で、いやな思いをさせるとおもう」

こんな私でもいいの・・・と聞くと。

美香が偉い人だと俺につりあわなくなるからいいの、足りないところは二人で考えよう。

といってくれた。

この人と歩いていきたいと思う。

優ちゃんいいかな？

明日に向かって歩こう

今日中に中野と、家の実家に挨拶に行きたいと言い出す彼に、もう少し落ち着いてからでは駄目なのかと問うが譲ってくれなかった。・

・家はともかく、中野の家はいきなり訪ねるのは無理がある・・・。

「・・・私の気が変わらないかと心配なの?？」

思わず聞いてしまったその言葉に、少しはそれもあるけれど・・・と正直に言われた・・・。

私が傷ついた顔を見ると、いや、それだけではなくって・・・とあわてて否定して

・・・仕方なさそうに白状した。

「じつは・・・」

・・・彼の話してくれた内容に、私は呆れた！心底呆れた！本当にあいた口がふさがらなかった！！

なんと彼は、同期の友人たち、後輩、病棟医長、教授まで巻き込んで、私との仲を許してもらうための実家訪問の時間を作るために協力してもらってたと言うのだ。

成功した暁はむこう半年の当直交代と雑用を引き受ける約束をして・・・。

「入院患者は僕の一存では減らせないし・・・でも、状態の悪い人をもって不在でしたでは無責任だし・・・みんな事情を話したら快く協力してくれて・・・、だからこれから、当分土日は当直か日直、受け持ちも一気に増えると思うし、今日明日を逃したらいつ挨拶に

いけるかわからない・・・」

だから・・・と、最後は消え入るように言った彼の話を聞いて・・・呆れると言うか・・・驚くと言うか・・・あいた口がふさがらない・・・今度の一件は賭けの対象にはなっていない・・・よね・・・？

「ほんと・・・呆れた・・・。」

でもこれだけは確認しておきたかった私は、彼に向き合って聞いてみた。

「・・・で？　むこう半年間は、いつ休むの？」

「・・・え？　とびつくりした顔で、私を見る。」

「人の当直もらって、雑用増やして、受け持ち患者さん増やして・・・？　今でも結構ハードワークだと思うんだけど・・・あなたいつ休むの？」

啞然とした顔で彼が返してきた。・・・考えてなかった、と。そうか、休みがなくなるんだ・・・と、つぶやく彼の顔を見ていて、私は眩暈がした。

本当に、この人は、かしこいんだか・・・馬鹿なんだか・・・。

2人で車で実家に向かった。

実家に行く前に、日置は優ちゃんのお墓に向かっていた。

「場所知ってたんだ。」

「彼にも断りいれないといけなかったからね。」

途中、花屋に寄った。ガーベラとかすみそう、およそ献花にふさわしくない花を日置は選んでいた。

「・・・夏もあなただったの？」

きよんとした顔で、美香を見ている日置を見つめる・・・そうか・・・それでおじさんたちは嫌がってたんだ。くすくす笑いを漏らす美

香を怪訝な顔で日置がみた。墓地の駐車場に着き、墓標に向かおうとする日置に美香は言った。

「お花は、部屋に持っていくからここでは出さないで。」

美香の言葉に残念な顔を一瞬したが、日置と美香は墓標へと向かった。

「優ちゃん、美香の残りの人生を真一君と一緒に歩きたいと思うの。良いかな？」

美香は、それを言った後暫く、周りの葉音に耳を澄ませた。暫くして少しうなずき、そして続けた。

「でもね、お墓はここに入るから安心してね。」そしていたずらっぽく笑った。

そんな話は聞いてないと日置が美香の横で怒っていた。

「だって、生きてる間は私を独り占めするんだから良いじゃない？」
笑う美香に、じゃあ俺もここに入ると訳の判らないことを日置が言い出す。

「ここのお墓の横を予約したら？」という美香の冗談に、事務所は何処だろうと真剣な顔をして言った。本当に馬鹿じゃないだろうか
と、もう一度美香は笑った。

夜、叔父さんのところで彼は散々飲まされた。今までは泊りじゃなかったから電車で来ていたらしい。明日彼は運転できるんだだろうか？

「真一君寝てしまったか？母さん、優の部屋用意は出来ているか？」

優ちゃんの友人が来ても、客室に寝てもらってたのに……。びっくりしている私を見ながら叔父さんは笑った。

「美香ちゃんが前に進んだのに、僕たちだけ足踏みしててもな？」

それに・・・と続けた

「美香ちゃんが選んだだけあってこいつのしつこさと、馬鹿さ加減は、優に似てるぞ?」

・・・?ものすごく不思議そうな顔になったと思う。そんな私を見て叔父さんは、

「美香ちゃんは知らないと思うけれど優が美香ちゃんを好きになったのは、美香ちゃんが4歳の夏祭りで迷子になったとき、心細かったろうに自分のことは置いといて、まず優の心配をしたことがきっかけらしいんだ。」

・・・?

「あのころあいつは自分中心に地球を回してたからな? たった4つの子供の掛け値なしの思いやりに射抜かれたらしいよ。それから、成長してもそんな部分は変わらない美香にどんどん惹かれたらしい。それでな、君が中学のときに僕らを言いくるめたって訳さ。僕たちはあいつの気持ち揺るがないのはわかっていたが美香ちゃんがまだ若いから心配だったんだ。でも君も知ってるように外堀を固めてまんまと僕たちを言いくるめて君をものにしたよね。」

誤算は、事故にあったことだね。それがなかったら僕は今頃君と優に似た可愛い孫を抱いていたよ。でもそれもこいつがかなえてくれるのかな?」

叔父さんは、一息ついて自分に言い聞かせるように、言葉が続けた。　「もう、優は居ない。僕の中にそのことに対する葛藤がないとはいえないし、これからもなくならないと思う。そこで立ち止まっても優はもう帰ってこないんだ。優の時間は止まってるけれど僕らの時間は動いている。今ある事実を受け入れる事が大事なんだろうな・・・。いろんな事実・・・みんな受け止めて前に進む努力をするよ。ありがとう美香。」

よいしょと彼を抱えて、2階に上ってく叔父さんをぼっと見ていた。

自宅に帰り、リビングでお茶を飲んでいたら、父が来た。

「明日は彼は、うちに来るのか？」

そういえば、声をかけたのにどうして叔父さんとこにこなかったんだろう？怪訝な顔をしてると、父が笑った。

「お前は確かにうちの娘だが今回のことで取り残された気になるのは、貴裕だからな。志半ばで、自分より先に子供に死なれるのはつらかったと思うよ。俺たち以上につらかったと思うのに、あいつらはお前のことをいつもまず考えてくれた。お前が今度結婚するならまずあいつらに許可をもらうべきだと、ずっとおもっていた。だから今回はあちらがメインだ。・・後日、日置君とはゆっくり話させてもらうよ。」

早く寝なさい、そういつて父は自室に入っていった。

・・・・・・・・・・ありがとう。ゴメンナサイ・・・・・・・・・・。

あさ、叔父さん宅を訪ねて、朝ごはんの準備を手伝った。9時過ぎになっても彼が起きてこないの、起こしに言ったが・・他人の家で爆睡中だった。

たたき起こそうかと、そっと寝顔を伺う。疲れてるんだろうなと思、部屋を出るためにきびすを返すと、いきなり腕をつかまれ、引き寄せられてベッドに倒れこんだ。

「!!!!!! ななにするの!!!!」

私の唇に、キスを落としながら、彼は言った。

「おはよう、やっと捕まえた。」彼の腕に力が入って、抱きしめられる。

「・・・寝ぼけてるの・・・？」

首を振って彼が続ける。

「・・・いや、幸せを、抱きしめてる。」

その時、おじさんがいきなり入って来た。

「美香ちゃん、別に無理に起こさなくても!!!!!! ごめん!!!! すま

ない!!」

私たちはあわてて離れたが、間に合わなかった……。

気まずい思いを抱えながら、階下のキッチンへ降りた。

「……すみません。朝から不埒なまねをいたしまして……。」
奴が、真っ赤な顔でうつむきながら言った。

新聞を読んでいたおじさんがこらえられなくなったように、爆笑した。

「優は!! ノックしてから入って、良く怒ってたよ。でも僕は無視してたけれどもね。あんなシーンは昔は良く見たもんだ。久々に見れて楽しかったよ。」

叔母が、

「ことには及んでなかったんでしょう? いいじゃない服着てたなら。優なんか、自分は半裸で、美香ちゃん脱がそうとしてた現場押さえられてたわよ」

と……追い討ちをかける。

「……それは僕は、なんとお答えすればいいんでしょうか……?」

まじめな顔で、返す彼を見て、叔父さんはますますつぼにはまったらしく、笑い転げていた。

「……まあ、とりあえず、ご飯食べたらず?」私は、一応助け舟を出した。慥然としながら奴は食事を始めた。ごめんね、ああいう人たちのよ……。これからいやって言うほど判ると思うけれど……。

朝食後、隣の我が家に彼と向かった。両親に結婚の挨拶をするためだったが、父の表情はすぐれなかった。

「……娘をあんな目に合わせた君に預けるのは、実はまだ抵抗がある……。」

母が、仕方ないな……。と云う目で父を見ている。彼は下を向い

て、黙って聞いていた。

父は暫くうなだれている彼を見ていたが、母に促されてしぶしぶといった感じで言葉を続けた。

「君のご両親が先日僕達のところに来てくださった。」

「……え？」

「成人した、しかも命を預かる職業についている息子が命を軽んじる不祥事を起こして申し訳ない。……と、しかもそんな男にお嬢さんを任せるのはいやだと思うが、どうか許して欲しいと。御2人に玄関口で土下座をされてね……。」「……。」
彼は、驚いた様子で目を見開き、じっと父の言葉を待っているようだった。

「本当に覚悟があるのか？」

黙って同じ様子で、父の顔をじっと見ていた。

「もう判ったと思うが思うが、美香も、私たちも優貴くんを忘れることは出来ない。それでも本当にいいのか？」

彼は、最初に父と向き合ったときと同じ表情で父を見て、ゆっくりと父に言った。

「中野先生がこの世に生きていたと言う事実は僕が否定出来ることではありません。そして、美香が彼を愛して一緒に歩いてきた日々も同様で、僕に否定できる事ではありません。僕に出来るのは、僕はその事実を持って美香とこれからどう生きていくか考えていく事だと思っています。」

父は、彼を見つめ……あきらめたように言った。

「・・・言うだけでなく、実践してくれ・・・美香の泣き顔はもう見たくない・・・。」

父の顔を見ながら、彼は・・・すみません・・・と、謝っていた。

そんな彼の様子を見ながら父は続けた。

「それと・・・。」

「隣で、不埒なまねをするのはほどほどにしたほうがいいぞ？あそこには何処に監視カメラが隠されてるか判らないからな？」
にやりと笑って言う。

怪訝な顔をしている彼に私は小さい声で言った。

「嘘だから、気にしなくていいから・・・。」

父は、そのささやきを聞いて、にやりと笑いながら言う。

「嘘だと思うか？美香、お前と優貴のお宝映像が隣にドンだけあると思うんだ？婚約前の優貴が帰省したときの映像なんか面白いぞ、お前に手を出そうとした優貴が、お前にけられているシーンとかまであるぞ？」

私は立ち上がって思わず叫んだ！！

「何でそんなのがあるの！！！」

「だって、あのころ優貴はお前を手に入れるのに必死で手段を選んでなかったから、貴裕がお前のこと心配し優貴を脅して押さえるネタに使ってたんだ。」

あきれた、本当にあきれた・・・。

父がうつむいて溜息混じりに言った。

「・・・結婚式に、編集して流そうと思ったんだけどな？今度貴裕に処分するように言っておくよ。」

「・・・美香？処分せずにおいといってもらったら？もちろん僕は見たくないけれど・・・。」

「・・・いいの？」

「それを見て、美香が泣かないって約束できるのなら。・・・まあ、泣いても慰めて、ベッドに連れ込むネタに出来そうだから、良いけれどもね？」

その台詞に私は、真っ赤になりながら、答えた。

「それってこの場で、ここで言う台詞・・・？」

「・・・なんで、駄目なの？」

ニヤニヤ笑いながら彼は続けた。私はそれを哑然と聞いていた。父は笑いながら、言った。

「なるほど、貴裕が優貴と似てるって言うはずだ。」

「どういう意味ですか？」 「どういう意味？」 私たちは同時に叫んだ。

「幸せになってくれよ。真一君娘を頼んだよ。」

家をでて、両親の許可をもらった私たちはその足で市役所へ向かった。もちろん婚姻届を出すために・・・。

届けを出した後、彼のマンションで抱きしめられながら囁かれた。

「奥さん、ずっとよろしく。」

こちらこそ、ずっといっしょにいてね。

翌日都に事の顛末を報告した。彼女は呆れたように聞いていたが、そのうち泣き出した。やっと優兄ちゃんが天国にいけると・・・。

・・・そうかもしれない・・・。

みらいのいろ

槇原先生に、結婚の報告をした。優ちゃんがなくなったときにとっても心配をかけたから・・・喜んでくれるかと思っただが・・・。

あまり嬉しそうでなく、そうか・・・と一言言っただけだった。

槇原先生の奥さんに、子供はあたしが取り上げるからよそにかからないようにと言われた。それと・・・

「ごめんね、あの人あんまりいい顔しなかったでしょう？」

「反応にがっかりしていた私は素直にうなづいた。」

「中野君は彼の中ではまだ死んでないのよ。」

「時間がたったら忘れられると思っていたけれども、形を変えて悲しさは続いてるって一番生きていて欲しい人を助けられなかったって・・・毎年命日には一人で泣いてるのよ」

「・・・だから、本当は美香ちゃんが前にすすのもいやなんだと思うわ。」

「それが、いいのか悪いのか、私にはわからない。でもごめんね。そんな彼の不器用な面も含めて、彼なのよ。」

私は、奥さんの顔を見て素直な気持ちをぶつけてみた。

「・・・私が結婚した事もいやなんでしょうか？」

「それは違うと思う。」

「美香ちゃんが可愛い妹で幸せになって欲しいと心から思ってるのも事実。」

「・・・でも・・・と続けられる・・・」

「中野君と言う一番彼が大事だった人のことが、薄れていくのが許せないと言う気持ちがあるのも事実。難しいわね・・彼自身もまあまわしてると思うわ・・・。」

そして私のほうを向いてにつこり笑って、こう続けてくれた。

「どのくらい時間がかかるかわからないけれども、きっと折り合いはいつかつけてくれると思うから、もう少し待ってあげて。」・・と、優しく微笑みながら・・・。

わかります、私も優ちゃんは忘れられない。そして、優ちゃんと、真一君も比べられない。

優ちゃんとの想いではなくならない、けれど、それを持った私で、真一君と2人で生きて行こうと思う。

事務局で手続きをして、師長に報告した。苦笑いしながら、今度はちゃんと手続き踏んでねと笑われた。

・・・・はい、お騒がせして申し訳ありません・・・。

一部の風当たりが厳しかったが、まあ、仕方がないことだろうと思う。

彼は、自分がごり押しして手に入れたのだから、波風立てて、気が変わることのないよう静かに見守って欲しいと、いろんな人に言っているらしい・・・と都に聞いた。

ほんとに、自分からへたれた印象を作ってどうするんだろう・・・。

ため息をつく私に、都は笑った。

「半分は本当に、半分はあなたへの風当たりを自分のほうに向けようとしてるんだろうね。」

それはわかる、でも私も自業自得なところがあるから良いのに・・・

。

まあ黙って守られといたら？と都は笑いながら言った。

「結婚式はどうするの？」

「……うーん……めんどくさいし、止めようかと思ったんだけど……」

「……叔父が許してくれなかった……。美香ちゃんの花嫁姿は、絶対見ないといやだと、子供のように地団太踏む叔父を見て……仕方ないので折れた……」

「むこうの立場を考えると、しないわけにもいかないし、でも見世物になるのもいやだし……」

あんたってホント世間一般の乙女心からかけ離れてるよね……。と都はため息をつく……。

……。そうかなあ……。？

式は結局せずに、披露宴のみ行う事になった。あまり華々しいことはしたくなかったが、彼の立場を考えるとまったくしないわけにもいかないという父の意見を尊重した。

披露宴で花嫁衣裳を着るので、結婚式を行う事にはこだわっていなかったが、真と自宅に帰省中叔父とおばに呼ばれた。

部屋に入るとウェディングドレスがあった……。

「……どうしたの？これ？」

叔父と叔母はいいにくそうに、真を見て言った。

「優が、お前に用意していたんだ。」

そのドレスは、真っ白でなく光線の具合によって淡い青みがかかった色になった。

「本当は、処分しようと思ったけれども、捨てられなかったんだ。」

私は近づいてドレスを見た。そうだ、優ちゃんにどんなドレスが言いかと聞かれて、答えたときに思い描いたドレスに似ている。

「夏の旅行で、あいつは、教会の予約をしていて2人きりで式を挙げるつもりだったらしい。優が逝って暫くしてから連絡が来て引き取りに行った。」

叔父は私たちの表情・・・真の表情を伺いながら続けた。

「本当は、内緒で処分を考えたが出来なかった。美香ちゃんにも言うまいと思っただけでも優の気持ちをみて欲しかった。美香ちゃんにだけに見せる事も考えたが・・・それは違うだろうか？」

こわごとと真のほうを振り向いた。真を見ると無表情でこちらを見ている。怖い・・・表情が読めない。私はもう一度ドレスを見た。優ちゃんの笑顔が思い浮かぶ。でもこれは受け取っていいのだろうか・・・。

「・・・全然嬉しくない贈り物ですね。」

不意に、真が言葉を発した。

「・・・本当に、いつまでたってもこうやって面影は追いかけてくるんでしょうね。」

悔しいけれど・・・と。

そして、ドレスに近づいてそれを手にとって、私にあわせて言った。

「・・・悔しい事に、今のみかにも良く似合う。」

「きつと彼は、何年も先の美香まで見えていたんでしょね。」
もう一度、ドレスを戻してから言った。

「披露宴の前に式の挙げれる、開いてる教会を探そうか？」

「・・・いいの？」

私の言葉にきょんととして、そして苦笑いをしながら言った。

「キャパシティは狭いから、やきもちも焼くし、愉快的気分でもない。」

でもね・・・と続く。

「ドレスを送ったのは中野先生かもしれないが、その着飾った姿のみかの横に並ぶのは俺だし、その美香を抱けるのも僕だけだ。教会なら天国に近いから見せ付けてやる事も出来る。勝手に天国で地団太踏んでりゃいいんだ!!」

最後はすねるように言った真の顔を叔母のくすくす笑が追いかける。
「じゃあ、せいぜい悔しがるように仲のいいところを見せないかね。」

そんなお婆の言葉に、叔父が、すねたように言う。

「僕の前ではいちやつくくなよ！隣に帰ってからにしろよ？」
にやりと叔父に笑いかけて、2階の部屋を借りても駄目ですか？あそこなら見えませんよ？と返す真。叔父は真っ赤な顔をして、お前は何処まで不埒なんだ!!と怒る。そんな2人のやり取りを私と叔母は呆れた顔で暫く眺めた後。インターネットで教会を検索するために2人を残して部屋を出た。

教会の見当をつけた後、叔母が言った。

「アクセサリーはどうしようか？」

「叔母さん、優ちゃんにもらった、サファイアのネックレスとイヤリングがある。」

「ああ、あれね・・・でも本当に真一君嫌がるんじゃないの？」

「さすがにリングは真にもらったものしかつけないので大丈夫です。」

」
それに・・・と続けた。

「あのドレスは、多分私にくれたネックレスたちに合わせて作られてるんです。私がプレゼントしたアクセサリーをしないって、良くすねてましたから？」

ふふ・・・と、おばが笑う。

「そうね、すねんぼで、見栄っ張りで、俺様で・・・良く美香ちゃんあんなのと付き合ってたわね？」

今度は美香が笑いながら言った。

「でも可愛かったですよ？大きな子供だったし。本人は私がお子様で甘やかしてるつもりだったみたいですよけれど？」

「・・・実は美香ちゃんが転がしてたのは、私たちみんな知ってたわよ。」

2人で笑った。こんな風に優ちゃんの思い出で笑える日が来るとは思わなかった。真のおかけかもしれない。叔父と真がもめながら入ってきた。本当になんか方向性の間違った仲の良さの様な気がする・・・。教会の話、アクセサリーの話をすると、真はまた無表情で良いんじゃない？と言って、新聞を見ながら、指輪もすれば良いのに・・・と付け加える。
・・・いいえ、しません。それは私のあなたに対するけじめですから。

言葉にはせずに、真にわかるようにゆっくりと首を振った。真がほっとしたような顔をして、そしてすぐに無表情にまたなったのを見ていた。都合の悪い感情を私に読まれまいとする真の努力の顔がそこにあった。

ありがとう

結婚式の当日、その日は晴天だった。教会での式は本当に一握り

のごく親しい人たちのみで行われた。

「マッキー先生・・・」

披露宴に招待状にも欠席の返事しかくれなかった牧原教授が来てく
れていた。

「ああこのドレスか・・・」

「・・・？」

苦笑いしながら牧原先生が言った。

不思議そうに顔を見る私に、笑いながら暴露してくれた。

「当直中にな、医局で熱心に何見てるんだろうと思ったらな、結婚
情報誌で。」

「・・・・・・」

「特集記事のドレスを穴の開くほど見ていてな。ちよつとついった
ら、夏休みに旅行の計画を立ててサプライズで挙式しようと思っ
て真っ赤になりながら言うんだ・最初は何の冗談かと思ったよ。」
目を丸くして、牧原先生を見た。私のその顔を見ながら、ますます
にっこりと笑いながら楽しそうに先生は続ける

「美香ちゃんのこととは知ってたけれど、まだ高校生だろう？早いん
じゃないかって聞いたら。僕はもう16年待ってるよと来たもんだ。」
「・・・・優ちゃん・・・何処で何を言ってるの？私は顔が赤くな
るのが判った。」

「本当の式には呼ぶから今回は呼べませんすみませんって真っ赤に
なりながら言い訳してたのが面白かったな。」

こちらに向かって走ってくる真を厳しい表情で見つめながら言葉を
続ける。

「情けない話あいつがいなくなったのは僕はまだ認められないんだ。

他のみんなが前を向いてるのに何でだと思うよ。でも、申し訳ないが僕の中では終わってないんだ。」

そして、息を切らしている真に向かっていった。

「俺は、いろいろな意味でお前が美香ちゃんと結ばれる事に納得していない。前に半端な気持ちで手を出すなら覚悟しろといったな？」笑顔だった真の表情がこわばった。

「お前の覚悟がどんなものか、これからのお前に見せてもらうよ。」美香ちゃん、さすが中野が選んだドレスだ良く似合ってる。真のほうを向いて榎原先生は言った。そして、式場に向かっていった。

「あの人は僕にいやみを言うために来たのか？」真がむくれて言った。

確かに真に対する牽制もあるだろうが、この結婚を、祝福をしてくれる榎原先生の気持ちも判った。そしてそれに気づいてるが、素直に喜べない真の気持ちをじっと見ていた。

「……なんか、いたい事有るのか？」

「……みんな、素直にならないとね……」

笑った私の頬を白い手袋を持った手でなでながら、「敵わないな……」と小さくつぶやく。開け放たれた教会の扉の入り口から父と叔父が呼んでいた。

「始まるみたいだ。行こうか？」

入り口で叔父と父の手を取った。そして、バージンロードをゆつくりと歩き始めた。

優ちゃん見ててね。

翌年、双子を妊娠して、安静を余儀なくされた私は、そのまま仕

事を辞めた。翌年男の子を出産した。

その、2年後再び、妊娠今度は女の子だった。叔父は私が使っていたらしいゆりかごを出してきて大満足だった。

真は相変わらずの激務だったが、救急のみに絞ってからは、少しは子供と時間が取れるようになったと喜んでいる。

槇原先生は、相変わらずで。何時でも別れればいいと不穏な事を言って真に嫌がられているらしい。

都は、山本先生とゴールインして、子供が出来たが2年後別れてしまった。

理由は、意外な事に、山本先生の浮気だった。子供は都が引き取った。

「まあね、私も悪かったのよ。いつも彼よりも仕事優先だったし。」

山本先生は、一度の過ちをひどく後悔しているらしく、都と復縁したがっているが、都はまったく意に介していなかった。

「そのうち、家庭的なお嫁さん見つけると思うわ。」・・・と。

彼女は職場が変わることもなく、仕事を続けている。

毎日があっという間に過ぎていく。なぜか実の父親よりも、優ちゃんの面影の濃い長男と、父親にそっくりな次男。彼らは2卵生だった。

長女は私たちの遺伝子を半分ずつ受け継いでいた。

今私のおなかには4人目の命がある。

「あんだけの激務の中でよく子供作る暇があるな?」

4人目の妊娠時に報告を聞いた叔父は呆れながら真に言った。

「・・・10分あったら充分ですから」

しれっと返す真に叔父が真っ赤になって怒った。

「そんな独りよがりのやり方で愛を語るな！！！」

笑い転げる叔母、行き場がなく真っ赤になる私。本当に仲良しの方向性絶対間違ってるって・・・。

みんなが寝静まったりリビングで真はペーパーを読んでいた。

真に背をを向ける形で私は座って雑誌を読んでいた。ふとぎずくとこちらをじっと見ている彼がいた。ゆっくりと立ち上がり、こちらに体を向けてかがみこんで彼は言った。

ずっと愛しているよ・・・・・・・・・・。

斜め35度右後方からその声はした。

私は、ゆっくりと声の方向に振り向きそちらに手を伸ばし、その人を抱きしめながら言った。

私もだよ、ずっとそばにいてね。

あいしてる。

みらいのいろ（後書き）

お付き合いありがとうございました。これにて終了でございます。

こちらへの投稿はもちろん！文を書くのも初めてという、私の拙い作品にお付き合いいただいた皆様。本当にありがとうございました。

お気づきのかたもいらっしやるでしょうが、この話は本当は前にもう一つ話しがあって・・・そこからの続きになっております。

そちらは、ものすごく、暗い終わり方をするので・・・こちらが先になってしまいました。

もし、機会があつて、覗いていただけるのなら、その内多分・・・無謀な試みに再びトライいたしますので・・・読んでやってください・・・。

前半は、ラブラブじれじれ・ちょっとエッチ（？）になるはずで
す。

本当にありがとうございました。

皆様の、ご健康と、ご活躍をお祈りして・・・。

清水澄 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9803z/>

斜め35度右後方からその声はした。

2012年1月10日01時52分発行